

江戸の
はな

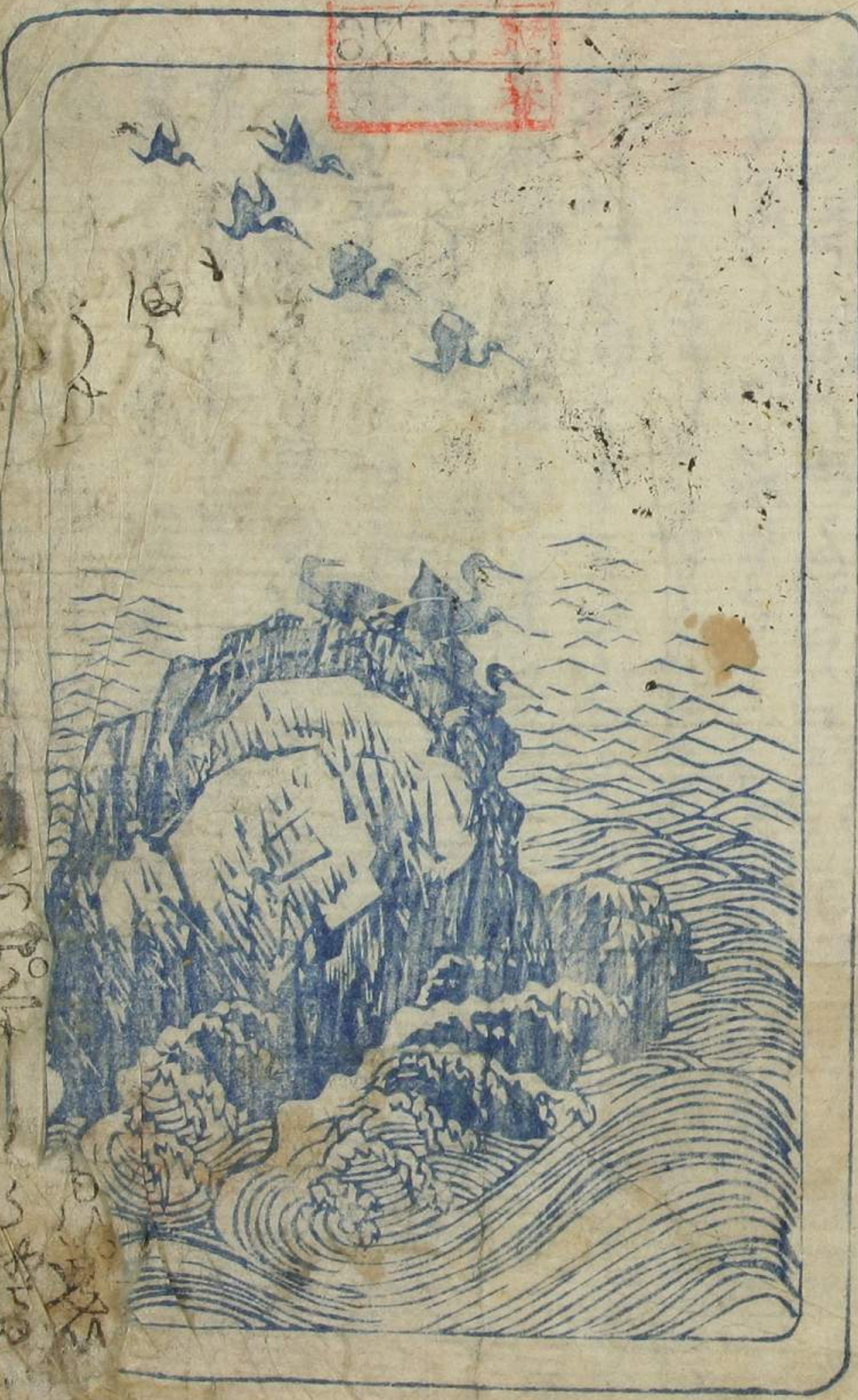
江戸のまじり



| | | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|--------------|------------|--------------|--------------|
| 日本橋より 二里 | 高川より 二里半 | 川崎より 二里半 | 江戸より 二里九寸 | 戸塚より 二里 | 藤沢より 二里九寸 | 日本橋より 二里半 |
|-------------|-------------|-------------|--------------|------------|--------------|--------------|

ル 4
5176





Red square seal impression, likely a collector's or library's mark.

Vertical handwritten text in Chinese characters, possibly a title or description, located on the left margin of the illustration.

41 7062

門ル
號 5176
巻



濱

濱のきこ波うちよもや。高のひるまのりこもるみ。
 毛とよめ旅びりせき入る。
 日本橋より筆をてて
 拾得のしるすまきさのいぬさるま序み記この。
 名所旧跡古より素歴。唐の火和の穴さこの。
 志らりころがり子綴りし。切技学尚村学究。
 都と平丈我乃たてずつら。石塔さのみの中るま子
 本葉かきかぬきしこあて。唐の村はむりこのかたは。
 真流りよねられし。見きこせしこ精しる。あ。
 筆もほろりせし。山本院百味溝の道中しる。あ。
 志らりころがりし。けりもさるまの。かひさのり。あ。
 ころも板元の工夫もさるまの。あ。

金鑿山光とあふく鎌倉の扇がは谷もろとたつと。
 舞のひとりの袖が薄。静なる世のあひま。同者
 こゝろこゝろえの杖とあのみー 胸怪とさくこゝろ
 ひとよするこゝろ。

水上清き玉川の。玉がすあふこゝろ湯
 して。はた此業のなかり負ても。さふは
 男半更。寺と羅金鷄がめりりこみ。

我は骨張の江戸ッ子

平亭銀鷄誌



凡例

- 一 此書江の島海づら人の便もりたりやそ日本橋より筆を起し江の島までの道法を本々くもり其間の名所古跡とてなり驛々の圖を諸名家の筆とて著し加えたる名家の詩歌と題す又此書を見久人の眼とてこれを人か為たり
- 一 原より此書傳覽の大人も不見する小あづき只旅客の心えもたふとて考へ江の島の圖とて驛舎の名取より西町東町のありを記し参詣の順路。山内の古跡。江の島各産。百味講の價旅籠宿の直段とて細くあるや。いとをまきるわらふかあそび道中不安内の人とみちびく第一の便り
- 一 江の島の来由名所。旧跡。寺。諸書小のまゝとて其の大人の説とて其の出入りなればちびりともあびくるもんと元々名所とて旧跡もあつたをいふてわらふ小あづき江の島はうんと題をもちやの事なれば旅人の得まふとて耳と音とて敢て穿鑿の論とていふべし

凡例

一 未だ道中のころ元二十ヶ条并小所持大に禁方二方といふ是皆年
 来経験の良方なり此書とあむ小幸りて是彼の書より抜かす一に良方
 小用ひて其効と知るべし
 一 江戸嶋より鎌倉へつるの間小記すべき事いとおありとて小を以て鎌倉活くわくと
 小名をなす此書は其道のりともりて来由とて龍目寺固瀬川くわんせ川がわ重かさね
 瀬止のうちに古跡頗あり後日発見の時と待ちてとるべし

あつまつてそのなを林のこわしとてなるとある國は万代 金雞
 のさうりながら思ふ齡やううやん踏ハ小年毎ハ万代 橋洲
 とんむうの姿のふと動きささやううなる茶もさうて 真顔
 果て代ハまじりて小依ハ小洋のなまに研と針なまて 馬琴
 とさほめる國の光りも積りさうぬは代もさふれしと 銀雞



江の島
 濱のさざ波

江戸

江戸

平亭銀鷄撰



日本橋

日本橋品川へ二里



此橋ハ江戸の中央より橋方への名法とれより下流は
 長サ二十八町石のさ小所城を元又橋天のハるまの
 毎小町とて一橋といふ東小町とて江橋といふ小一橋
 とし小町一よりハ南は長後後あり小小舎は後あり由糸
 浮後小舟をさうへくと五町くとあるよりのハ初め

俗にこれを二石橋といふなり。此橋を八石見の橋と
 もいふ。一石橋より見れば日本橋。江戸橋。馬場橋。新橋。御台橋。
 亀橋。及三橋。常盤橋。とある。よみてかくはつけしとなり。
 銀鷄云日本橋の石数を記し十二石と記せる。蓋しゆきあり
 又いつ頃なりしや。これの書も年号を元禄を改すり
 の年代記。元禄元年小つくと記す。又大江戸春秋といふ
 書も元禄元年小つくと記す。とあるなり。
 熊阪邦

諸侯、玉帛見、陶鈞。日本橋頭起、紫塵。天外、芙蓉、回望出。江
 邊、樓閣入、看新。彩雲高、傍黃龍閣。碧水遙、通白馬津。南去
 北來皆此路。相逢半是官遊人。

- 通町 四丁 中橋南傳馬町 三丁 京橋 長サ十二石
- 銀座 四丁 尾張町 二丁 竹川町 出雲町 金六町

新橋 芝口 三丁 源助町 小橋有 露月町 芝井町

宇田川町 振川 土橋有 神明町 右は美神町の宮あり

濱松町 四町左小橋有 金松橋 金松町有 芝橋本芝 四丁

田町 九丁あり 四丁目七 芝橋より八町是より右の方西のと

びやくあり 右の方三回八幡の宮あり 渡邊の
 綱が守り本芝といひ結つり。芝の熱門八田町九丁目

あり日本橋より四十六町半芝橋より十四町なり。江戸砂子
 小川小三田切運寺の境内小綱が塚と称するあり。海兵衛

といふ。會津屋山下を發の内よりあり。が申の年の田
 録よ亡びたりといふ。すて綱が跡ハ此もふくむあり

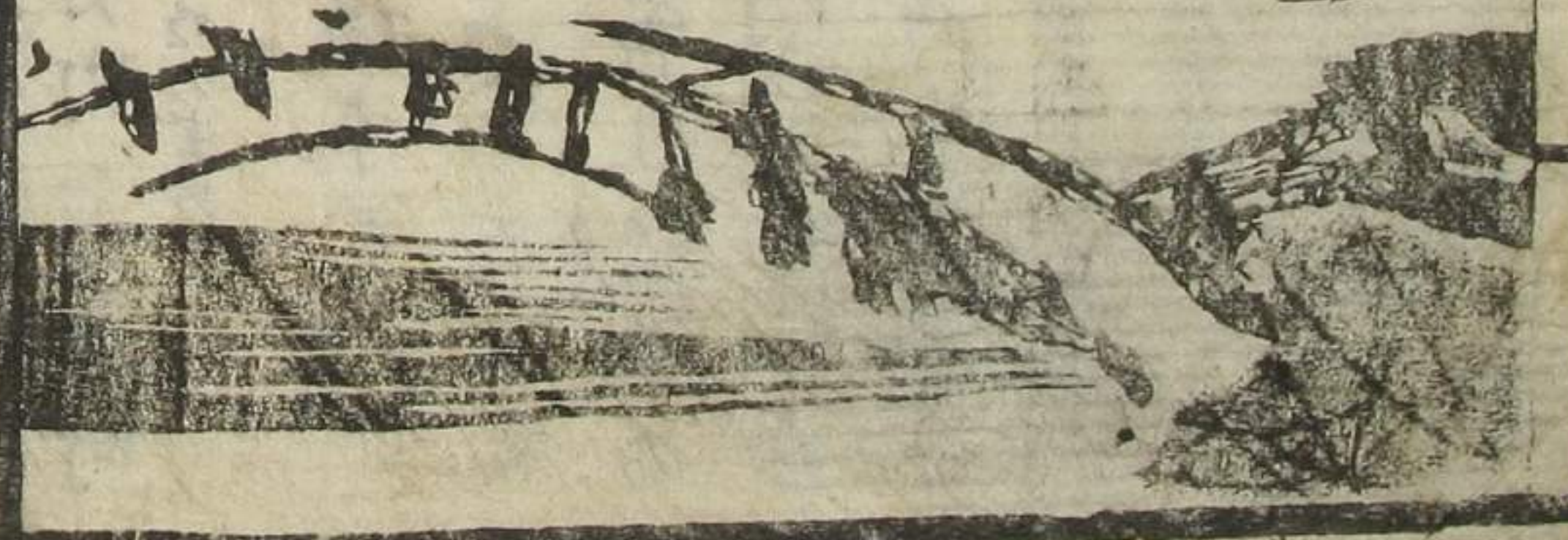
兼中、大畧、御書、小あり。いすといふ。とも。里人の後、後

五景
無

昨閣汝形船
可居魚可過

松也
[Seal]

白布橋
布



長江のけしき
[Seal]

多き波のやま

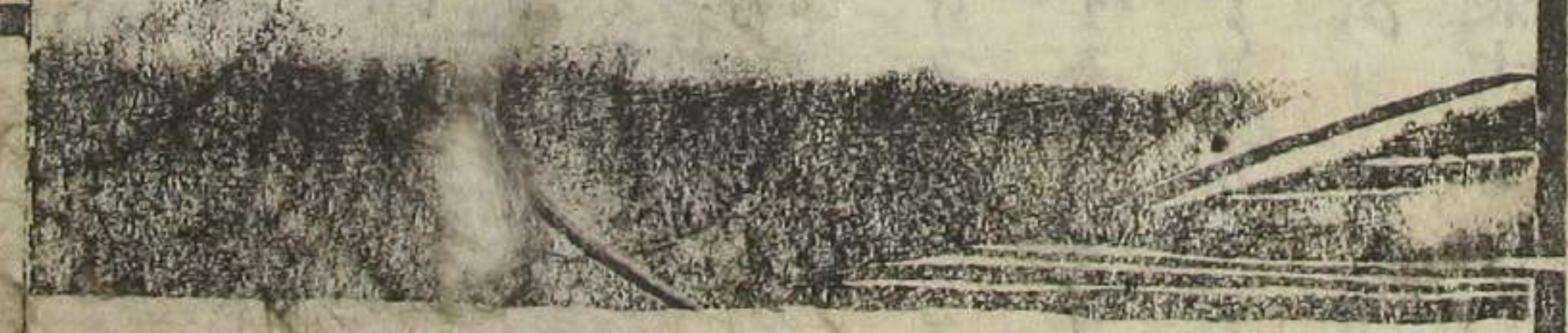
無法

[Seal]

白布の橋

水好山奇生
御座布橋去
雨是初程

五山人
[Seal]



のこゝと其燈とをさぐる処丹多峯翁の箕田園の池
とよるよ里人の虚後なりとさるゝと初めて明かりを
池のふ武お花系那法谷の莊箕田の邑八源綱藤跡
なり網老て仕へと辞しは処は終るさうしこの
うらやまの星霜とあるといどもそ塚が存在
あうのこびりい塚の上小松とうゑて迷蹤を標す
これ世氣のまぶ散せむ千家の餘情あるりのう明曆
の頃會津侯は地を賜たりお莊とくあふ今ふそ塚を
あするこゝ蓋そ勇と称しあふまゝべとあり
根鶏梅お多き家の箕田園池にいつるハ僧院のまゝを
祀りたりハ形編は戸徳小渡道系園貝原翁本音終

池おと引て是立那の箕田園とすといなり。半所これ
より忍川まてううの町なり右の山左の海そ安房
と総お後の沖とえりうて風雲なからあふ処なり
舟橋の表は徳さむるあるは所ふ忍川迄の海をさ
下る編といひ田町九丁の石をさる編といひ田町と半所
との境の後丁と念を後丁といひ忍川根草とて所
や池の稱す○高編の大佛といひ飯余山如來大
日院にあり天台宗とて上世の末に開山本食但鳴
の自作五智如來寛永十二年の起立外小石像の二まあり
は但鳴といひハ根草多田の産ゆと有馬の葉師の
はうし子ありといなり。下る編は有喜喜の表といひ

るありむう〜に大木の松一木とあり〜
りてねぐら〜をりらむるさび小糞をあらけたるも
枝葉ふか〜
とゆるむゑに鶴樹葉と〜
山の尾さ〜
処々昔は地味ぬの長の地〜
今ハコづう小町屋の〜
中〜

銀鷲梅は波の浮舟と〜
いの舟の女子〜
くむう〜

つて〜
あらの処を〜
梅との島の谷を〜
梅が系は芝田町〜
村の邊に〜
上校頼興と合戦ありし〜
左の〜
三ヶ寺のうち〜
より寛政の頃〜
す二月四月三月四月七月十六日小町〜
る〜

一人於十二文つゝよく系後せしむる義士の戒を
寫し板にとまひしむせり文政二年の暮龜田鵬
齋翁は処へ碑とまひしむる解鶴としてこれをし
む解鶴八碑後とありふ小奴をえると普く人の知
知んぬのれとひしむる中ふすりいませる文を
小載す

赤穂四十七義士碑

義烈之出於精誠而動天地感神明者其盛蹟凜々乎為
百世人臣之標準焉乃可以敷薄俗奮士風矣元祿年間
故赤穂侯吉良氏不遜刺之於廷中不克乃坐不畏
朝廷賜死國除以其變出不虞一藩臣士倉皇失措議
論鼎沸人心洶々其趨趨不能自振者皆縮手墜膽逾久

要之盟奔奮激新挈室而逃之其輕躁暴徒負志氣者
皆奮然扼腕以期批城拒命致死殉君而勿去焉耳殊
不料其所以教君臣之經常犯國家之典憲反重先君
罪之義也大石良雄赤穂老臣也乃從容拒羣議守禮奉
法獻城而違之其志蓋在報先君之讐也於是歛舊藩志
士四十六人自操節制而堅衆志定謀分部夜潛入于吉
良氏邸殪之於一擊卒霽先君之幽冤於九泉下矣然以
寅夜擁衆動兵於都下府廷依其律以各賜死焉泉
岳寺侯之功德院也其寺僧息公請其屍得允座諸先
君墳堂之左右乃表曰四十七義士之墓嗚呼息公亦義
士哉凡往來其下者率徘徊歔噓而不能去迄今百有餘
年而人之思慕如一日雖小夫婦人孺子皆誦其姓名
感激流涕稱不其義烈之出於精誠而所以動天地感
神明者凜々激勵千古耿々乎共宇宙不磨也如此矣且

良雄首事唱義之間。歸其心跡而不洩其謀。經歷困詰而不挫其志。先事而候仇家之便。察其嘖呻。其胆胸或既。酒招妓以銷吉良氏之忌。而解其警焉。其意念深苦。非一日之積也。又使彼四十六人皆承其指揮。守其節制。一舉以善濟其事。則又可以併觀其優才。足以運籌深智。足以投機矣。此其盛燭之所。以前後有一而無二。獨赫赫乎耀於千古者。蓋亦在乎斯矣。嗟呼。夫天理人心。誰實無之。苟有人心者。又惡得不欽其風。而悲其志哉。余每聞赤穗遺臣事。未嘗不感激扼腕。而為之橫涕也。而當時。談者妄撰異論。設曲說以檀議其事。至甚者。則認春秋書法。題義士以賊稱。是其人非媚嫉。忠風浩蕩。則或天理人心之滅也。亦幾乎矣。臣儉人以詭辨傷善類矣。其觸神人之憤者。豈可不畏欤。謹念良雄等四十七人。其心事如青天白日。浩浩正氣。猶凜々能使鼓天下之義氣。而激天下之士風。

則關世教者豈不亦大哉。今住持釣公大轉法輪弘賜宗風。於是紹故住主恩公之志。而崇義士之墓焉。因使余撰文勒石以建諸墓側。嗚呼。釣公亦義士哉。
文政二年卯巳春三月
江戸 龜田興撰并書 廣瀬群龍鐫

品川

品川小川寺二里半

或説小武將の國品川の武將古品華を深むる也なり
とあり又訓園集小むさしのく小大らりの庄く品華を深むる也あり甲冑を製す小齒菜華を引く也
品小く深むる華也
銀鷲柿すゝ小源平盛衰記に源頼政品川城の事あり

あつりと化しつゝあり

山崎闇齋

驛次指来^レ到^リ品河[。]僕僮^レ促^ル々[。]事^レ駟^レ馱[。]海[。]亭[。]暫[。]立[。]眺[。]望[。]介[。]不[。]

動[。]雲[。]間[。]知[。]筑[。]波[。]

○東[。]之[。]博[。]中[。]松[。]の[。]そ[。]と[。]さ[。]く[。]あ[。]を[。]さ[。]う[。]さ[。]う[。]さ[。]ん[。] 馬[。]丸[。]光[。]廣[。]卿

此[。]訳[。]の[。]入[。]に[。]と[。]野[。]所[。]と[。]の[。]小[。]稲[。]荷[。]の[。]社[。]あり[。]享[。]保[。]の[。]こ[。]ろ[。]也[。]
この[。]社[。]より[。]水[。]不[。]あ[。]り[。]なり[。]し[。]よ[。]り[。]今[。]ハ[。]所[。]が[。]み[。]ま[。]あ[。]ち[。]づ[。]
さ[。]う[。]り[。]衣[。]の[。]こ[。]ろ[。]小[。]平[。]按[。]伊[。]四[。]子[。]也[。]乃[。]及[。]あり[。]は[。]道[。]を[。]
ハ[。]ツ[。]山[。]と[。]の[。]小[。]御[。]殿[。]山[。]衣[。]の[。]こ[。]ろ[。]乃[。]裏[。]あ[。]り[。]太[。]回[。]
乃[。]其[。]在[。]位[。]の[。]地[。]と[。]い[。]ひ[。]つ[。]て[。]寛[。]永[。]の[。]こ[。]ろ[。]御[。]將[。]の[。]所[。]殿[。]あり[。]
一[。]ゆ[。]急[。]小[。]所[。]殿[。]山[。]と[。]い[。]つ[。]つ[。]よ[。]り[。]本[。]ま[。]あり[。]て[。]い[。]と[。]涼[。]一[。]さ[。]
処[。]へ[。]出[。]て[。]ん[。]ハ[。]寛[。]文[。]年[。]中[。]小[。]回[。]祿[。]廿[。]一[。]と[。]ま[。]なり[。]此[。]山[。]上[。]橋[。]の

木[。]あり[。]昔[。]在[。]世[。]の[。]橋[。]の[。]齒[。]や[。]ら[。]也[。]一[。]と[。]い[。]ふ[。]今[。]ハ[。]木[。]
と[。]ち[。]り[。]て[。]花[。]と[。]さ[。]う[。]さ[。]う[。]さ[。]う[。]さ[。]う[。]一[。]毎[。]暮[。]花[。]見[。]の[。]事[。]御[。]
難[。]集[。]と[。]す[。]と[。]上[。]野[。]日[。]暮[。]小[。]む[。]す[。]○寛[。]永[。]十[。]七[。]年[。]九[。]月[。]
十[。]六[。]日[。]品[。]川[。]所[。]殿[。]と[。]毛[。]利[。]秀[。]元[。]宗[。]の[。]湯[。]所[。]ら[。]の[。]み[。]あり[。]て[。]
御[。]成[。]の[。]み[。]さ[。]り[。]沃[。]菴[。]和[。]尚[。]一[。]と[。]い[。]は[。]れ[。]と[。]ま[。]と[。]あり[。]な[。]れ[。]ハ[。]
沃[。]菴[。]と[。]い[。]つ[。]す[。]ゆ[。]か[。]ら[。]れ[。]と[。]ま[。]と[。]あり[。]は[。]ん[。]こ[。]の[。]
ま[。]ま[。]り[。]と[。]な[。]は[。]し[。]の[。]が[。]る[。]海[。]の[。]月[。]と[。]緑[。]下[。]な[。]れ[。]ハ[。]
御[。]感[。]辨[。]が[。]い[。]ふ[。]と[。]れ[。]より[。]夜[。]の[。]ひ[。]り[。]十[。]六[。]夜[。]の[。]月[。]所[。]さ[。]う[。]さ[。]
ふ[。]ら[。]り[。]な[。]れ[。]ハ[。]又[。]と[。]ま[。]と[。]あり[。]あ[。]ら[。]の[。]な[。]れ[。]と[。]な[。]あ[。]忍[。]と[。]ま[。]
ち[。]え[。]一[。]山[。]の[。]か[。]い[。]ハ[。]あり[。]なり[。]と[。]の[。]み[。]ま[。]と[。]あり[。]て[。]この[。]日[。]
晴[。]と[。]ま[。]なり[。]○東[。]海[。]寺[。]の[。]た[。]の[。]こ[。]ろ[。]の[。]山[。]中[。]小[。]つ[。]り[。]方[。]松

川 品

品川のうらやまのうらやまの
いほやうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまの

嘉

江の川に流るる水

うらやまのうらやまの

月も照らす

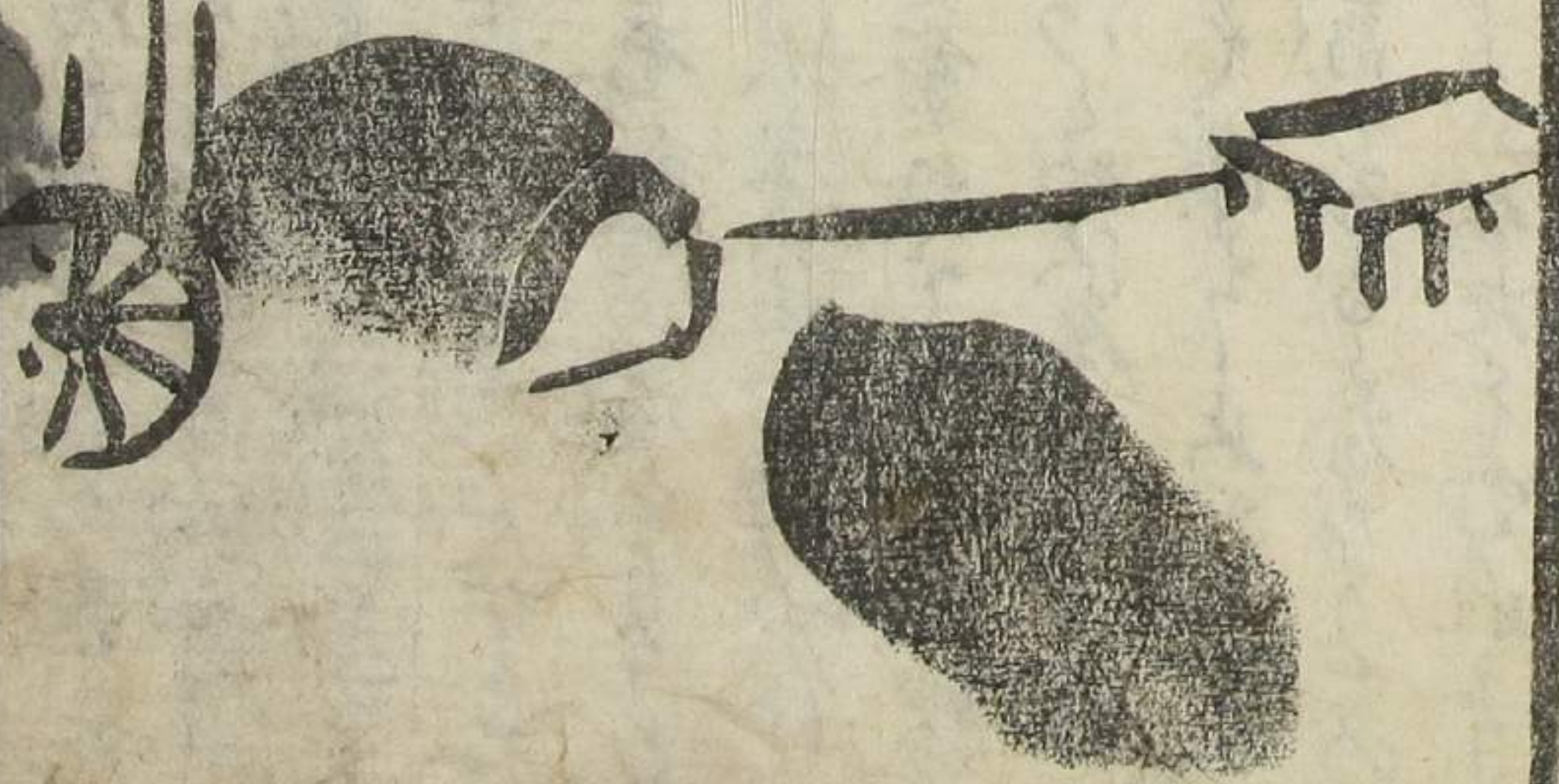
小舟中を海



為湖
園

殿身桜花里春
涼雉子新
年離別地出也
如夢人
嘉

殘夢朦朧到品川
纔知塵網免纏牽
曉風吹醒心胸爽
恰當陽鳥飛上天
善庵老人



出と号す寛永十年の佛建立に岩倉の関基之泉水
 つきや半眺を斜にりては鏡景の地あり。岩倉に於ては國出
 石のつぎれりて三浦の系義明の系秋庭細廣のふり
 正保二年乙酉十二月十日寐す春秋七十三。阿山廟所大なる衣
 とうぬれのききとて三つひさぬり先利高の遺るありと
 う。今徳國を漬る地の香の拙の沢庵は佳如者のつけ
 はどをられし一廟をよりを重ぬるは岩倉漬の
 おりのつりぬ或人の句のむらけは岩倉漬の
 根緒云沢庵漬は沢庵和尙の之更と漬をくだれたりの
 漬と名づけられしと。幾年も蓋ひぬるもななりこの
 漬とのと時の將軍「ま」しと。公たをむれり

しくの漬ふあはれは岩倉漬なりとのあひりしとりは
 院あり。○或人利高は梅エをかくりなれば梅のころりてとて
 昔より一木のすがさちありて世々志しなれぬるあり
 がらしうまの又ぬり海は十里海と然とてとておつり
 くれは十里といふに五里といふるは少しなれぬる世身
 を志せり酒。○海晏の紅雲の各所の最勝なる岩倉の塔あり
 ○妙空法師の塔あり。○大天ありて合あり
 ○私川古観音堂ありこれ今自志し寺と云はれぬるは
 ○破産川は海をなれりしに下りてる。ゆゑ素は川
 とのふとて又一院にむら。はるしの海中より大なる蛟潭
 の細ありしと。つぎりしがそは中より。正観音堂あり。

ぬふ人々奇異のありしをいへり 鮫の改てはまらぶらり
 より鮫の改もかきり ちまらぶらり 濱川神の社ありはまら
 獵所なり 〇はむき場の鈴の毒八幡の宮あり 盤舟の神社
 とのふ此道とわらぬの傍とわらぬ 荒蘭崎とあり 終の暮
 の傍にて 武彦の玉の名処あり 續江撰集の源忠朝は白
 波のつらぬの傍のそやれ松かきらぬのら乃人ぞつれなき
 又万葉集十二巻のつらぬの傍の玉を説きつれや君
 が山崎とありん 境月小宮ありらとくせむさる 由是終夜と
 られよよつて此処を終の夜とありふるべし
 根鷲のふ今へかきりて終の夜とありふるべし
 びしはむき池と長栄山とありらとくせむさる 日蓮宗の一本とあり

日蓮上人終焉の地なり

根鷲江戸志と梅すゝふ長栄山布の寺岡山日蓮上人開基日
 朗上人後宮を院弘安年中起立社原入跡其礼の地ありと
 あり 〇やまらぶ村 〇やまらぶ村 〇大森衣衣地終結前布標
 左ふ天神の社ありは布 〇中散の見世あり又むらぶら
 細とびして 〇おまらぶ村あり 〇桑清見世の寺ありとあり
 びしやらぶら 〇清とらむらぶら 〇はむき池の傍ありて風味
 最りゆきとの旅人往々これとあり 〇のつらぬのふ
 屋といつる酒家あり 料理頗かきり 〇志き村衣衣古川
 系原の乃あり 〇蒲田村北むらむら 〇はむき池とありてふ
 〇中は橋あり北むらむら 〇はむき池とありてふ

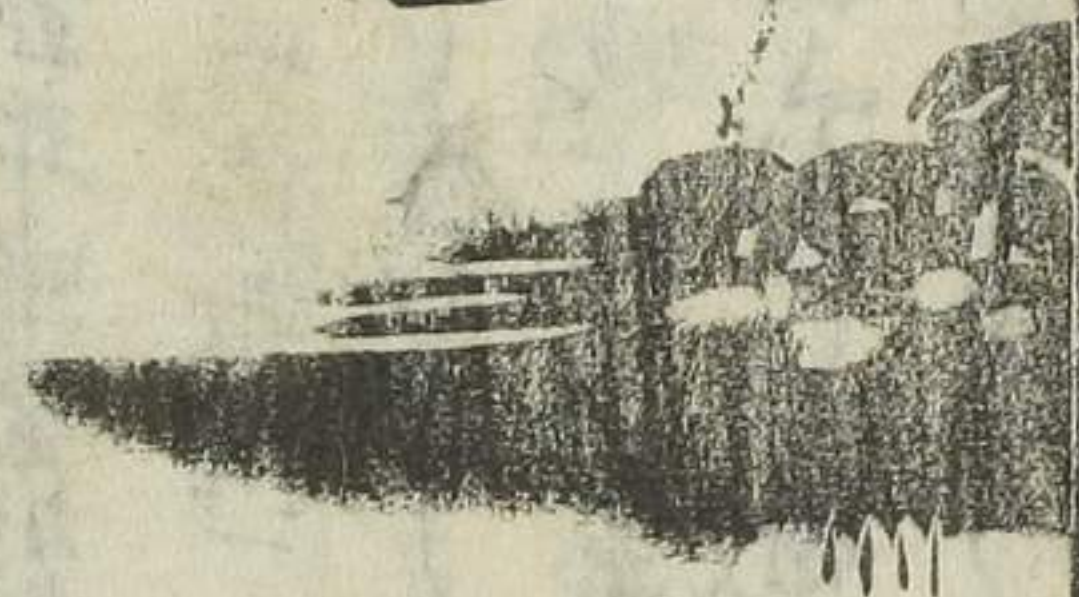
松尾林、武蔵野葎系那のやち、蒲田^{加古}とつる、則ち
 ちかべー、は速く、木の木とあり、うゑ、か、はひ
 や、そ、実と、どう、て、あ、さ、な、つ、と、ど、この、木、大、陸、より
 こ、も、ま、木、の、木、材、と、い、ふ、一、六、郷、は、也、昔、島、山、重、忠、傳
 と、ら、う、一、丙、辰、純、ひ、の、せ、り、秩、父、より、鎌、倉、か、お、む、む、
 と、この、操、鉸、や、六、郷、川、中、川、上、八、ま、子、の、り、な、の、れ、て、
 磨、川、と、い、ふ、水、を、通、し、て、江、戸、京、橋、の、南、の、用、あり、
 昔、は、也、小、橋、あり、て、長、サ、百、九、百、と、い、ふ、新、な、ま、け、り、
 や、り、い、ふ、も、大、か、し、六、つ、と、同、矢、部、勢、多、と、い、ひ、ま、が、や
 め、す、れ、は、洪水、小、橋、流、り、と、い、ひ、く、さ、せ、い、ふ、舟、わ、り、い、ふ
 ち、り、ぬ、舟、ち、ん、こ、文、の、此、川、上、と、矢、口、の、つ、と、一、と、う、い、ふ、延、元、三

年十月十日、新田、判、無、行、河、在、東、亮、が、は、り、と、を、遊、し
 あ、の、数、も、里、人、の、お、ま、の、を、歌、と、い、ふ、歌、一、つ、新、田、大、原、神
 と、つ、か、ち、あ、ら、も、一、枚、具、の、衣、牌、社、の、り、は、よ、い、り、さ、の、候、遠、を、
 あり、て、文、の、南、郭、書、の、鳥、を、り、を、年、志、さ、り、小、供、人、伝
 仰、り、て、毎、日、日、に、い、り、と、を、り、一、每、月、十、日、ハ、殊、は、群、集
 せ、り、六、つ、の、り、と、と、海、の、右、の、け、ハ、川、崎、の、入、口、方、へ、
 大、原、の、系、り、系、年、を、と、い、つ、る、系、を、あり、て、
 者、と、あ、ら、ま、り、と、い、る、大、原、の、系、り、
 ち、り、と、伝、書、は、二、里、と、志、ら、せ、り、と、い、り、
 と、い、る、と、一、大、原、の、系、り、の、鎌、倉、海、と、い、ふ、書、友
 ち、り、と、い、る、と、一、略、也



嗟
 去如如樓
 朴了
 ①

陽中
 山高嶺
 ②



ありまの
 ちまの
 うきまの
 ちまの
 ちまの
 ちまの

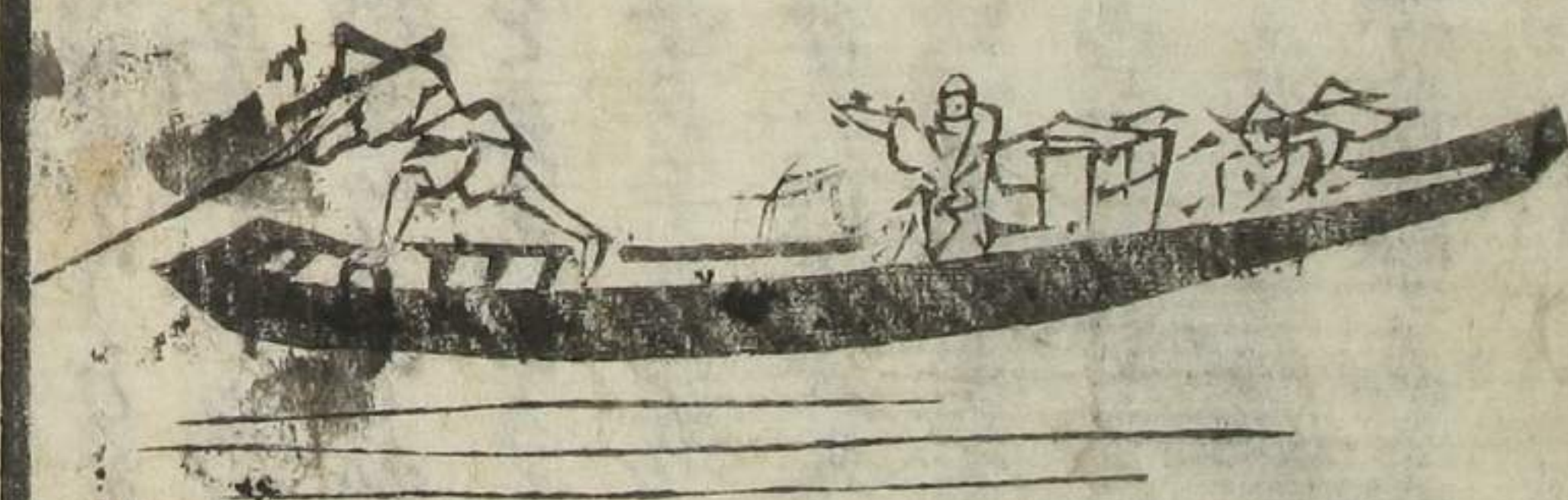
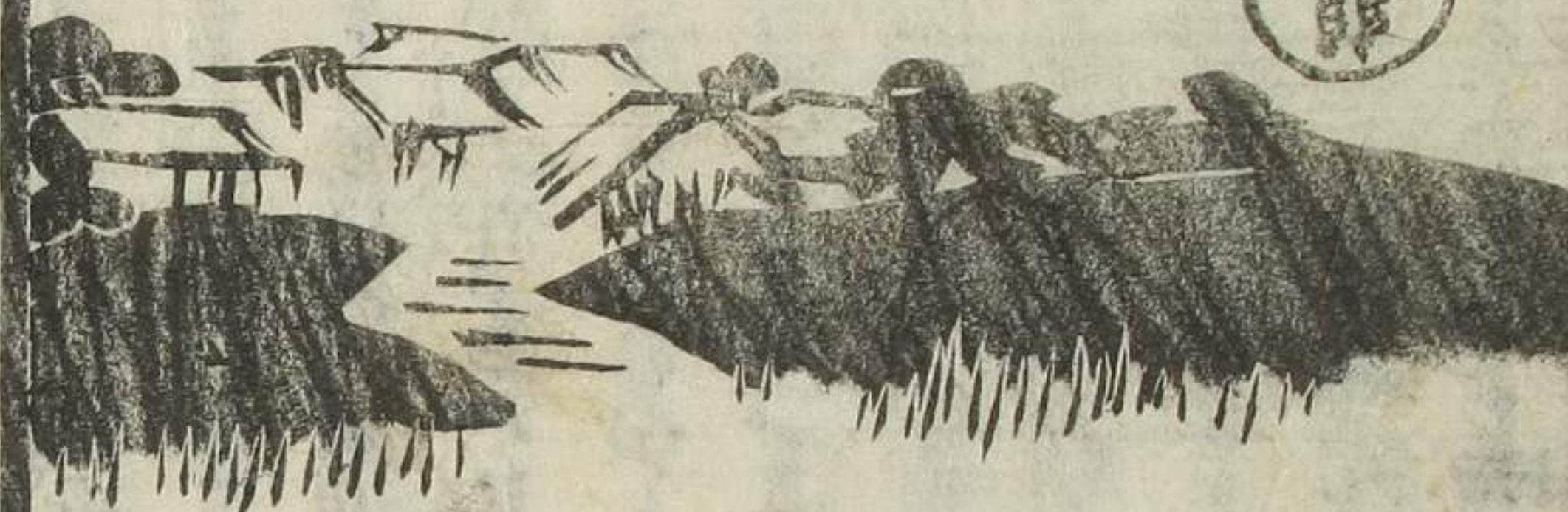
大推



崎川

河邊
 夕
 ③

④
 ⑤





川崎

川崎の金川へ二里半

此窟の入口左に石が散らばり見世ありつづれおびやかさ
へよく旅客をあへく此処にゆるぎなきと申すもふつと定て
すまへ延宝年中全加翁山崎闇齋此処にて
日午到河崎停鞞催二炊高申憑柱坐梧葉傍楯無
善枕むすび旅むすもあふむの長は代を 千蔭
此處の本物十二天の森にむす本物の沖へ風が吹れわ
がぶねぶねとなく風ふあふつうと云々八町
際両方格の並本ありておろとを〜市場村の鶴見

村のなまの麦の子お村の軒有つたて村石の山よりうり
ありやのちのにちりやをこの親者あり石の衣の向す
空あり永正七年上杉氏憲の信上回藩人小茶子雲子
此山よたててり〜と上杉より責は〜と怨といり

加奈川

金川の程が二里九町

此窟の根根沢根遠大屋なるてつてらとま〜びや〜
登あり石を介保者とつらさるるあも〜くあり藤ふ船
なれ〜像會齋やあり〜と繁島の地へ有るが〜加
奈川の甚く〜風景眺むて〜はま〜の

加奈川

投宿神奈川 涛聲一搖
孤枕不慣海 既札通宵
耿無寢

平甚逸士 耕田

留宿之記

山束

學子荒之錦屋
晴未飽一盃茶
讀此乾齋



文二

舟枕之記 政德
舟中記也
と原田ささ

梅ヶ川

磯家 達 壺 瓦 曝 綱
夕陽 村 一 望 子 帆
新 生 粉 白 鳥 翻

明芳為



谷ヶ程

谷ヶ程

凌寒

行矣高任
 前程那舞
 青松連城
 翠嶽悠々

鶴山



仁際池鏡

雪の花小

新町を
 横小
 板田の
 橋の
 尾松

神樹菴

不二の松

花のむすの

玉の

月を

程ヶ谷の春

ふりも

い

い

山

山

今曉江戸立

無程ヶ谷来

空後悦銀坂

峭崖何を哉

金銀舎持助

花

出

か

方外

印

の味を三四折りて料理もいと美味し衣のうへにほろろと糖衣
 乃山あり東下と芝生やりのなる店の人宛あり吾美鏡
 子のでたる仁田四郎がりのりあふりて。軽沢。遠分大山
 へゆりたりあり。帷子ついでら又ハ片平ともはまの沢せきなり。程ヶ谷
 とおなりふゆ急慶長二年小帷子新町程ヶ谷と合して一
 右とす

程ヶ谷

程ヶ谷か戸塚へ二里九丁

右の中布どたらハ小金山溪谷へゆりたりあり是より令沢
 まで四里九丁とりの。此常とひづれハ坂及ん。程ヶ谷坂及坂

につてあり。長巻村武蔵とよかの堺木建するあり。堺
 本ものか。志保の坂方小尾おしの軍のさうある。観音堂あり右
 のうへ小松山左の山く坂の上茶屋見せあり村をり。赤名橋
 小橋の。げとやとむとより。柏尾村大山及あり。五代橋
 ぬ橋あり。銀鑓云が裏抄ハ五五多橋とあり。右田村あり。こ
 くのまらうる。つり。露つゆと長巻と。二里。美鏡所
 程ヶ谷あり。一の右田橋とす。右田村ハ属す。美鏡所の次あり
 ハ右の無き橋とす。田橋あり。右。こがし。戸塚
 の内あり。

戸塚

戸塚か藤澤へ二里



是古



大家長規
驛深燕生
來也

江山為寶



乾坤一旅會日月兩車輪



雲樹の暮あふり雉子の暮 倉廩

踏出林間雨始曉遠山

夜曉溪上

多女入眼折し兼光景

雨曉若江

尤奇要何管後人之

上山

里程 好此老人



蒼翁



ほろとくしつとつこといふ所の説く昔嘗て人ありて堂をさし
たててあつたあつたのひより貨とて人どころす爰に文のの
ありしが武賊は殺さるるを美の鬼神とてつて経来の人まあ
てあるさうなりしむ一人の武士とて思ふとあつた織のつたにさ
れしよとてつて彼武士のあつたのひそ盗人とてつて
十人を殺ししつてつて頃ひも二十人の隊とてつてつてつて
しつて十隊といひつてつてつてつてつてつてつてつてつて
ありつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
あり。大坂。白土坂。赤坂。黒坂。ありつてつてつてつてつて
縄のつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

玉縄八むり。友九郎盛長の伝居せし地とあり
銀鈴。按小盛居居の地甘縄と玉縄と云ふは孫念志行囊抄
よりつて玉縄を孫念の山内より西のつてつて甘縄はつてつて
西路の北にあつた森林と云ふなりとあり。大塚村。寺あり。左
小ふつたの系所あり。たよつたつてつてつてつてつてつて
鳥昔は知小池あり。そ地は大砲す。そ孫客の教と云ふと云
よつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
沃の入口左ふ所は神の社あり

藤澤

藤沢。江の島。二里九丁

作は巨とつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
十六丁。二里。小盛。廿二里。廿三丁あり

十は子
此れ
ゆり
身
法人の
厚
と
好
ほの

宿と入りて左のこ小藤沢山^{藤沢山}に歸^りるもふもあり同家の
あるに用山遊^りの一遍と入かりと格姓^{格姓}孫玉の領^りを河原を
即通^り廣の三男^{三男}の量名と松丸^{松丸}とりふいとけりより
明^明教^教悟^悟して善^善松^松と号^して法^法一^一浮^浮屠^屠の院^院の所^所建^建長^長
平^平縁^縁教^教律^律師^師と號^して物^物受^受戒^戒一^一その浮^浮屠^屠の善^善
と入^入お違^違てお^お松^松門^門より建^建治^治元^元年^年の冬^冬十二^{十二}月^月下旬^{下旬}より
絶^絶の熊^熊野^野山^山の本^本宮^宮隆^隆隆^隆殿^殿二^二百^百日^日參^參拜^拜して七^七言^言四^四句^句の偈^偈と
さうり夫^夫をを^をと廻^廻り^り善^善く法^法人^人と授^授与^与す今^今に
て歴^歴代^代の上^上入^入法^法師^師と修^修け^けせり。宗^宗祖^祖一^一遍^遍上人^{上人}より今^今五^五十^十三
世^世といふ
おとあつた法のあつたと遊^遊び^びと入^入の^のを^をえ
西川嘉長

よ持^持め^めの^のつ^つつ^つの^の見^見よ世^世を^をす^す法^法乃^乃ち^ちを^をめ^める^るゆ^ゆ 進^進行^行上^上入^入
はさふ小^小栗^栗の石^石塔^塔十^十人の原^原原^原の石^石塔^塔ありとては小^小栗^栗が正^正年^年之^之
一^一く人^人はよ松^松灸^灸する^るとい^いふ^ふの^のゆ^ゆに^に法^法院^院と^とる^るす或^或書^書ふ^ふ云^云人^人
皇^皇百^百二^二代^代称^称光^光院^院の所^所に^に將^將軍^軍足^足利^利義^義隆^隆の^の時^時を^を永^永平^平二^二十^十年^年
の春^春第^第陸^陸宮^宮の住^住人^人小^小栗^栗孫^孫を^を滿^滿重^重と^とり^りの^のむ^むむ^むの^の子^子と^とあ
りての^のま^まら^らう^うと^とむ^むく^く深^深持^持氏^氏と^とて^て退^退法^法の^の為^為儀^儀余^余と^と陣^陣々^々
結^結縁^縁お^おひ^ひり^り八^八月^月二^二日^日より小^小栗^栗の^の城^城と^とせ^せむ^む。小^小栗^栗か^から^らむ^むに^に
城^城と^とす^すて^ての^のま^まら^らう^うと^とあ^あれ^れず^ずを^を子^子小^小栗^栗と^と法^法界^界の^のあ^あひ^ひに^に
ま^まの^のり^りら^らう^うあ^ある^ると^とを^をお^おあ^あじ^じん^んと^とい^いふ^ふに^に宿^宿る^るふ^ふを^を
強^強盜^盜も^もつ^つり^り小^小栗^栗が^が賊^賊家^家と^とな^なり^りと^と強^強す^す入^入の^のつ^つら^ら
ち^ちの^のり^りて^てう^うび^びら^らい^いお^おり^りれ^れと^とそれ^{それ}を^を毒^毒酒^酒と^との^の中^中を^を殺^殺す^す。

澤 藤

孫子之是年
膏澤去帝
學想以不休

旅中山端

紫高



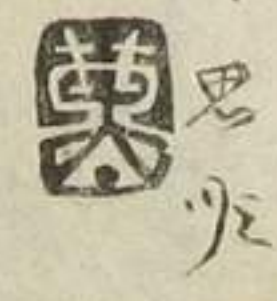
醒高三秋

枯藤侵曉步盤桓
煙樹霜風淡月殘
群動寂寥人未起
雞聲一落遠村寒
奧山萬



一雙不借一枝筇
行盡荒郊破驛
中詩格元來希
老陸閑遊不負
本家風雲山題

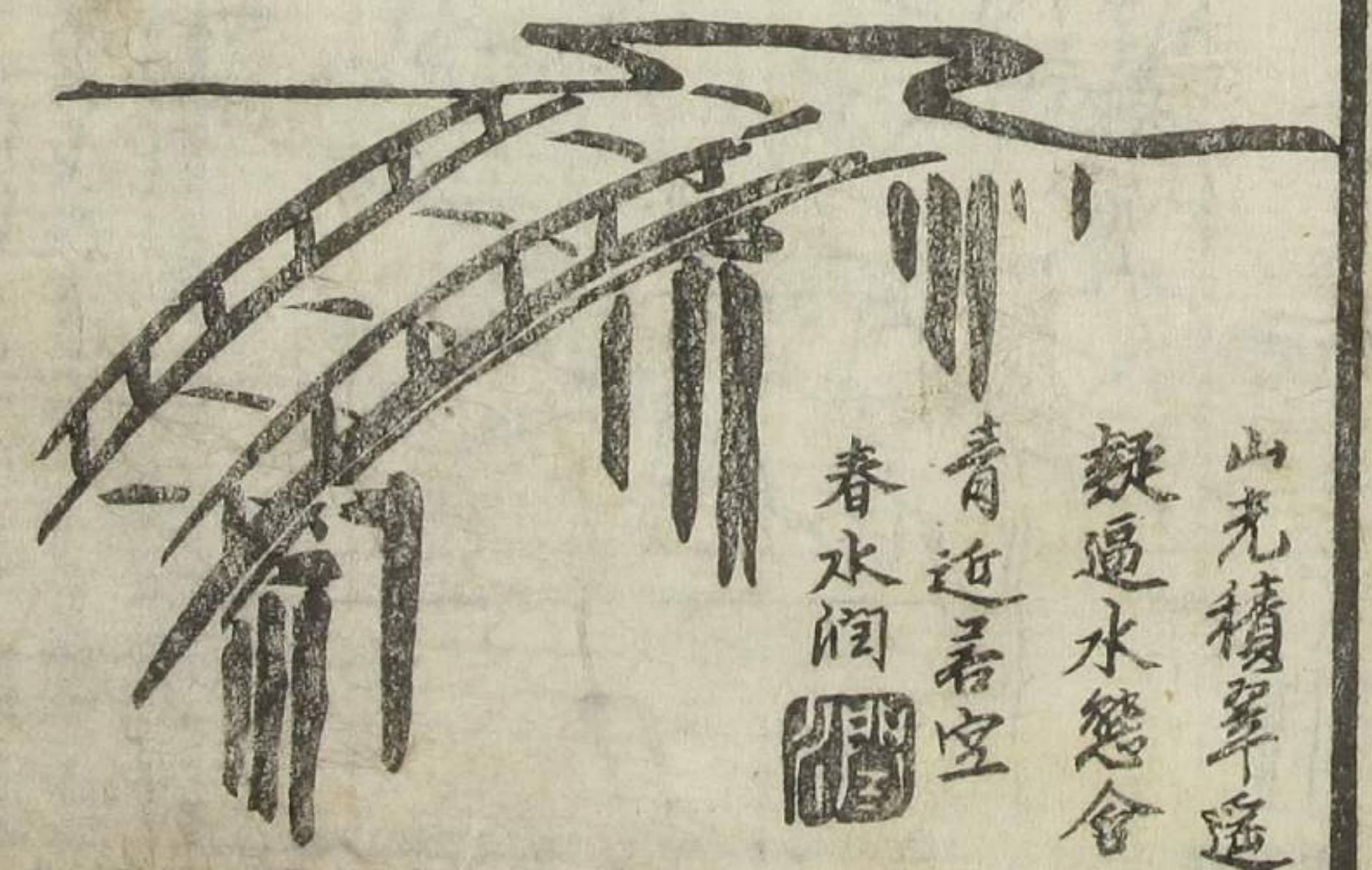
半是鷄
聲半馬
蹄



意仙の
あり
あり
あり

舟

雲溪宮



山光積翠遙
疑過水悠會
青近若空
春水潤



根元... 六月... 北... 竹... の... 生... 八... 二... 母... ね... 慶... 子... 八... 入... 入... 元...



年... 六... 北... 竹... の... 生... 八... 二... 母... ね... 慶... 子... 八... 入... 入... 元...



長... 五... 日... 神... 田... 繪... 所... 行... 秋... 後... 月... 本... 如... 之... 仿... の... 月... 廿...

くろまうちりやして小栗と地蔵の痴ふらそなり有るの遊女と
あつて酒宴と催しつるものも小照娘とあつた遊女この小栗
小あひなれしは後かぬ心より毒酒のこをひそふつぐら小
栗こらえて飲物よしとせまをもち林のうち小あひなれを
麻色なるものつまきおまらうこれ盗人のあつたゆめぬみ
まうしつるも荒るのゆめせひなりつるさあつらうなり
小栗ありとよりもの事人おれ六枚室と志すこのゆめ
ちのりむちをあかく片附のる小栗次郎の屋敷のがれゆめと
人とたのみて三枚おちゆきけら又孫と毒酒よつてら
れつる十人のおれはもと人あられぬゆめおまのあつたゆめ
入れのすしあつた徳盛権現の利益やみあつたおま

てかの盗賊とまづいづれしつるを存永守の次小栗三
物をあつた被控女となつたゆめおちの室とあつたゆめと世
小照天娘とあつた遊女照娘のゆめなりづれしつる小栗兼氏とあ
つた頼朝の時代蒲冠者乾乾の旗本とあつたゆめ頼朝のゆめ
なり小栗兼氏とあつた孫とあつた満重とあつたゆめ次郎助重とあつ
た銀勢強名志とあつた小栗とあつた三枚とあつた又あつた
とゆめとあつたゆめとあつた
又あつた栗の院のりく小いゆめゆめゆめを是むるとあつたゆめ
室州天竺川のあつた居のゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ
栗とあつたゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ
武のゆめゆめゆめ

宿の入口小橋あり橋のまゝ北の角小茶漬屋ありは橋をさ
 たりたのうら小瀬の大寺ありこれ見江の崎舟才天の寺
 ありこれ江の崎の入口にありは下なるはみとすこれみけ
 いたのうらこの小茶漬屋をみけの村と名をけ
 つの二丁やどむけむな子庚申堂ありは色眺屋とさうふか
 くは石の園畑のみは村と追れり石上との小村より村
 のたごうき知ま指石の社あり是より二丁ゆけは渡
 しあり此のうらと石と片殿とを村とせはつりきき
 前み文の渡しをわたりは左の角は茶やあり海肴販
 ばも菓子のおもぐく高なりの此処片殿村の御り
 みしは茶屋の前ふ茶屋のたありたの方たたきし

たのうらとせや一橋まじりたの方さう一たのうらとせや
 のうらとせや一と田畑は此とみくはたのうらとせやあり
 海肴のりはきふささるはたありふ茶屋ありたのうらとせや
 遊ちとりの寺ありは遊ちとりの寺ありこれ先やどむけむ
 石の角居りのは此ふ三田村とさう茶屋あり愛の古茶と妙
 鼻とありこれ江の崎入口の角茶屋と茶所とらむ道とさ
 とすこれむけむたのうらと南小中村とらむ茶屋あり是より
 江の崎まじり茶屋とせや左の海なりは遊三四所の茶屋
 たりとさう歩むは潮満とさう船とせや茶屋のうらとせや
 瀬川も瀬川とさうとせやとせや平の茶屋の若のみあり
 ひびをくぐりて江の崎の所なり

夷島



江ノ島

或繪の島と夏は花の島榎の諸ともけり金龜山與彌壽と号す
陸奥の入道と千一所半百とありあり諸の台を松光と号す

江の島の素世を尋ぬる小人皇九代開化天皇の六年四月以次
の南方小あつてうみづら之夜あひどうしと強霊とくまふ
雲捲騰うと洋くく百瀬天地をわらす救千の鬼神海
とふむく四のあつまり火とあふとまち風と波ははら雲
とあつて雷とひきこみ潮とまぐり岩をけがらすの島とふ
ちやのうちふらうら鬼神へらぐくくたがくまらたれ
がけ射と天はれ波あつまり碧金紫紅の雲くくす美音
雅樂とゆうくくくも射小令車と八童小かひ一人の天女あり
あり天兵神卒四辺と圍繞せりを道の村民とるう小此所

とけい漢文へらぐく
都心とすく移心とす
農文ハ世情とめりて中後とか
二年をくく六百九十七年として人
皇三代後明天皇の所定六年
胃紹とらて初めて高良の
例れふとあつて五皇統小建
保四年正月十日江の高明神他
宣ありて大法忍道略へんはよ
らんけいの人舟のくくくひわめくくむ
とて強会中の細素くんをすす強はて
未代奉るの神愛せり三浦を傳つ尉義

とけい漢文へらぐく
都心とすく移心とす
農文ハ世情とめりて中後とか
二年をくく六百九十七年として人
皇三代後明天皇の所定六年
胃紹とらて初めて高良の
例れふとあつて五皇統小建
保四年正月十日江の高明神他
宣ありて大法忍道略へんはよ
らんけいの人舟のくくくひわめくくむ
とて強会中の細素くんをすす強はて
未代奉るの神愛せり三浦を傳つ尉義



島

神武御親朝御のおんつらひとてくらの
 英定小参ることせりは島の開基也
 後山前波小森隆次小道智つが小松法太所
 後せりて文覚ト入も再興ありし是場あり
 是の風景真妙しとて開基抄の中小山あり
 の災かりては地小海されるるあるべし
 島のうらちを越え似たる由名小倉巻山
 とのふゆこむし十二の種ありては
 傳小純相す口名に轉来流とも種物
 とのふゆり
 江の島やうとて波路よあとする
 神いしかひの源なるへー
 鴨長明



若み桃
 寂菴

酒 江 嶋
 費 哉
 万 砂
 げ の 菟

江の島やちうひ徳しき儀さふ
 ち神なくば波のとあらん 舞福
 江の島大宮御社にありては神傳大日貴命
 し久延慶命とあむせどありて天照大神と
 なうとみそを和魂とまらるる名を慶命と
 びづけりし此神又ふりありて天女也
 けりしは傳の神祕とて江の島の入口と昔に
 本窟といひしは石室といひ又所もいひ
 は処を名ふ款舎ありて中の通りかへ後なり
 の中窟も岩本院といふあり別岩を天の別當
 といふ本窟の龍窟といはれり妻帯とありて
 慶安二年の津来有あり客殿の願を最本院と



東岳
 大正

涼風や
水二つふ
雲ふ
浪の上

慶長九年閏八月十九日秋田常樂院より龍の僧住持勢多宮のとき蛇の角と落したるを見て拾ふに漆状あり。その中ちやみ下の坊と



阿彌陀画像 弘法筆。北條氏康蓋文。江島縁起五巻作者。知事画。太田道灌軍配團作者。馬主。九穴貝。二岐竹。蛇角二本



城南

寶老

又鬼沙門金像 弘法作

と花と梅雲の具境ふ

院の宝物知るところ

月二日小移り

浪鷲ふは書三

縹山が筆なり



梅の雲

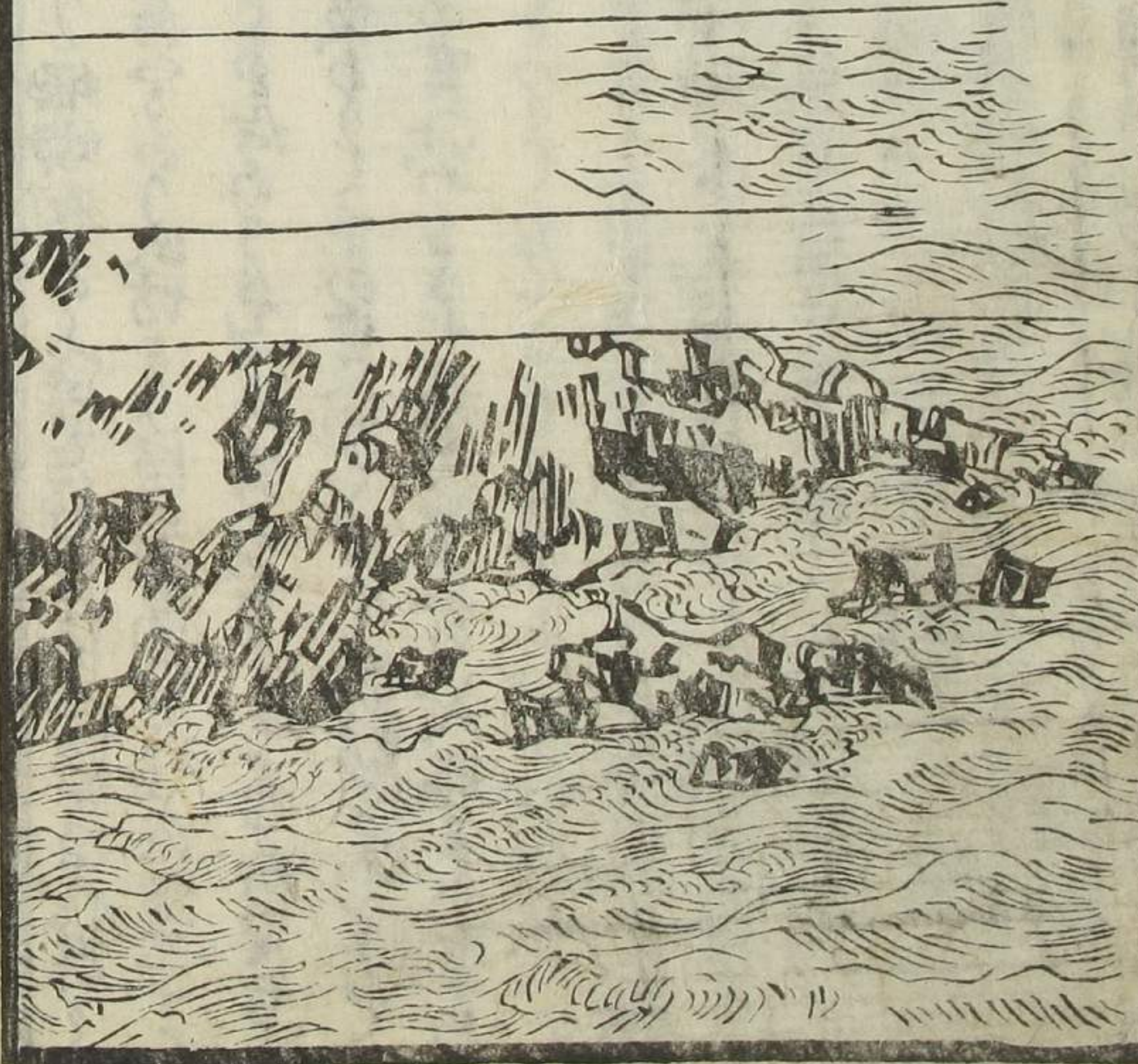
廿五

江島入口圖

驚波濺絕壁
老樹影參差
畫島真如畫
遊人歸去遲

北洋成題 詠成

遊江嶋
輕寒輕暖水烟開一點
青螺鏡面堆密樹吐雲
夕欲起怒濤噴岸々將
額深淵暗處金龜窟疊
嶂高邊天文臺謝子若
知東海美勝遊當向這
中來 德濟 印



江島之妙

江島の
下家たふとくを

入るる社
香車亭路の

山布衣樓あり郷
遊人東島海中矣
望絶景點如
吾輩即此樹傲
秋先 萬壽寺印

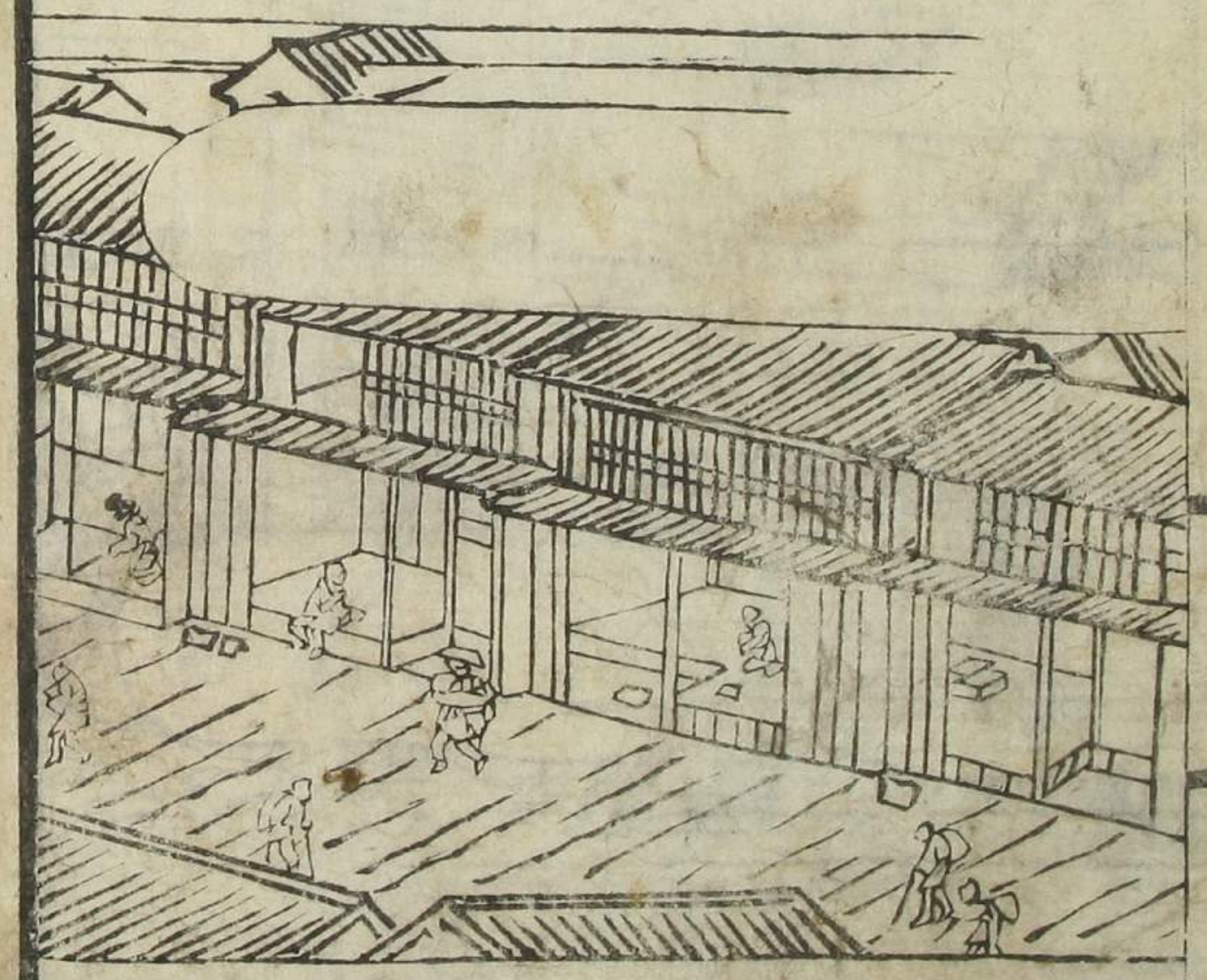


香車亭
文三

其 二 西 町 圖

煙村霞島
花多少山
閣水樓客
有善
龍葦葦 罍 罍

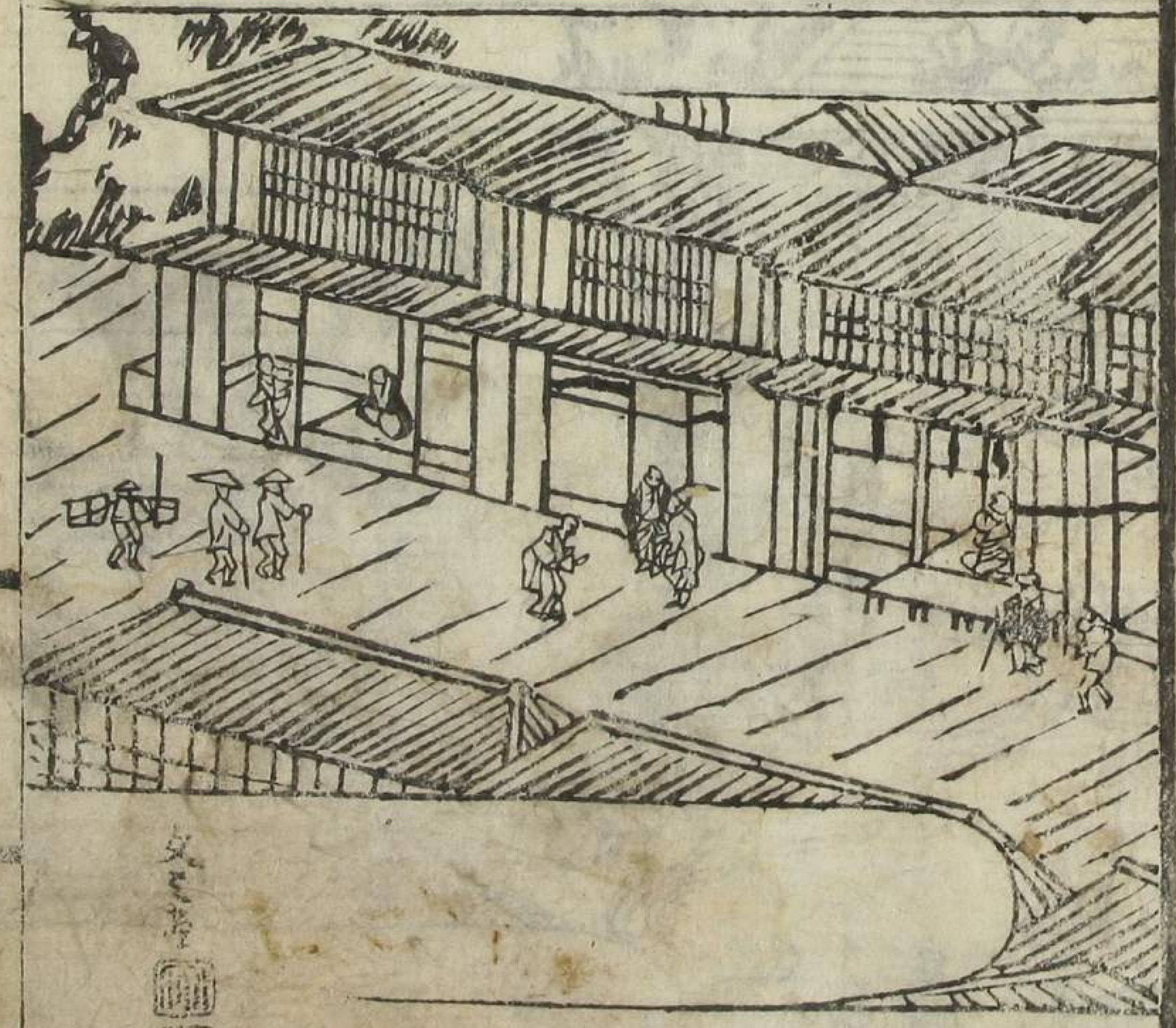
春の海 長史
鯉まむ
なびと
二二
り



十



いの一ぬか
あつち
余佳く
あいつやうな
はま
お女
岡山島
静ま
浪
ま川北
明



文三
印

三 其

路 逆 沙 際 入
翠 穎 正 樓 直
潮 駭 東 林 窠
雲 隨 凶 洞 龍

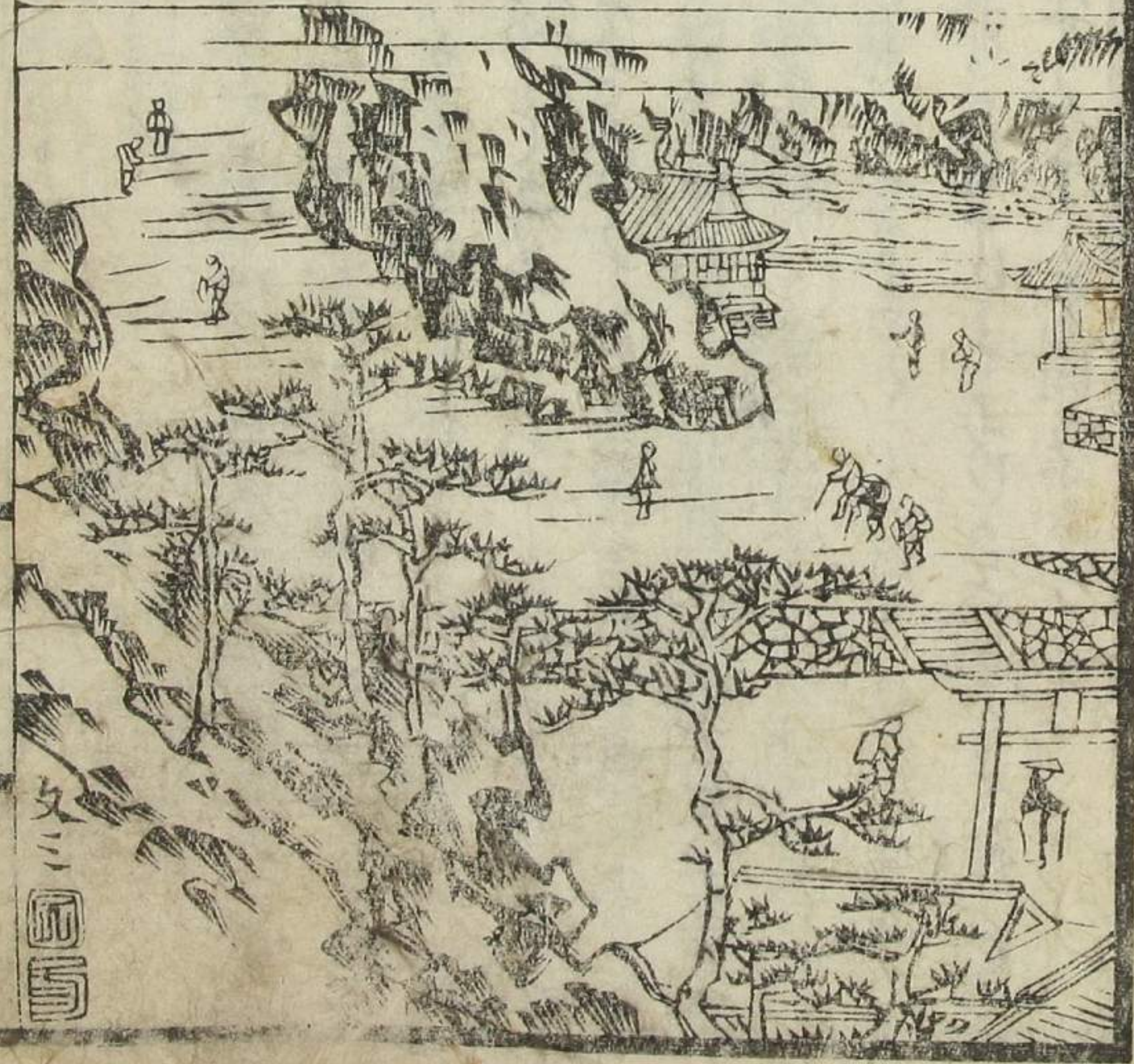
詠 齋



土 之 角 魚
七 石 之 像
肩 車 人
可 玩



彩 之 殊 多 似 也
可 寸 寸 似 之 不
疑 之 也 也 喜 味
八百 卷 の 一 冊
こゝに 江 の 屋 子
の あり 納 ぐ こと
心 みる 納 ぐ の あり ぬ
堀 午 め ぬ
八百 卷
岡 解 舟 あり みる あり
江 の 崎 を 多 みる あり
い せ ぐ 旅 人 と 嘉



文三
印



牛宮



上坊

上の宮と云ふ所の言はふ
江の東を坊の言はる

この宮のたのこふ屏風をとりつらりてまゝに足伴中へ入るす厚く
軍伴産をなり 中へまゝにまゝにあり碑文の知れぬをよりされ
てつぎあまをせりあり文字漫滅して分るるは篆額の名を云
龍ありのくも古種ありて奇異といひつゝ一銀額橋を政公坊が
ふ布して碑と掲げると是れがく先きの言を取りと懐紙小字
よりては男織籍と保せて縮圖せしむ銀額に碑の八皇十三代古
時門院の序なるは高宗宋國の慶仁禪師のまゝに碑と掲げりしと
いひ傳へる國の秘念志の載れどと又ありてふはたすは元化の
もととふ案のふるをいふるにありてありては國ありて後と
くありてふるにありては國ありてあり

董



銀額云篆額云日本國
江島靈迹建寺之記と云
文字ありては篆額
念卷の内を内へ
儀のその右の缺
ありて後とあり
りありては篆本
純と云ふ縮圖す碑文
漫滅しては
むまことあり





香
齋
三

下ノ宮

慈悲上人の因基入王八十三代土所の院の所宇正治
元年むろの法式よりからんと志をもつて修行するに一千餘
日及びり爾後建仁三年七月十日の夜宣の刻より若くは若くは
びる天女壇上小現どもい喜喜お若くは若くはぬる天女と人より
曰吾むろ一乘世の衆生を度せんがうは信すむと汝我あふむと
いとむむとこのこまひ一偈とまづけりか上人感涙糾すげりやく
神教と授受せり爰おいて上人願まのぢり地とえらひ神祠と遠上を
しめいそ像とまづみ又天女の若くは若くは秘するをえり爰不安置
なる是則下のその像あり○三層塔坂の上あり五智堂と
安す松山檢校是堂なり○稻荷祠
塔の左
あり○焰魔堂塔の右
あり○隨身門坂の上あり天女
觀と云願あり○牛頭天王神興坂の上あり天女
觀と云願あり○石鳥
居坂の上あり天女
觀と云願あり○福石坂の上あり天女
觀と云願あり



洞
齋

命形象跡車塵外
緇靈坐於亦景前

号東輝
三

濱の波もあきまな夜の花月

むのし
散るや様
らこの淵
さし波や
ありふらる
沙干波
曳尾

龍左水長碧
龍武



二
初
霞舫

縁會ふ
旅之縁
さる相い
こもの
か
ふりける
み傳授
ふり
五車亭

雪陣枕浪暗大空
勢鱗ら々舞長風
玉龍我返晴明日
待立氷芽茶海中

稱書

生斗牛雪まき
峰鳥習庵



勝典

まんきびまん
めいさんごんの指
まのまんの下の
ちかふらてい満

tetstet



龍



窟本宮 岩倉天とてもはの備合はま又千丁とては
のあまの備合窟舟と天と安置すも像弘法大師の作とて西の
内院弘法のか持水とり又入口の左大師の作の大黒ありをちとむけ
の玉院とわらうのとて胎胎界金剛界と表す又と奥小高部大日
如來と安置すとも天女根本の宝宮なりと表す揚あり又左の
のとも小いさの日蓮の跋尾石とあり日蓮上人は窟小なり一に上
小跋尾とて眞感といつる自法華經を書写してと名の月院小を
むとは法華經のあま岩倉院のけまもるなり。はのまの四号は本
小岫とありむうしんをもいてくとて。○人皇甲二代文武天皇の御宇三
年後仍著一言まの傳よりて保皇の大あまをくち地まき四月の無傷



五事
全

晴
香
行

動
月
香

智
法
齋

以
玄
弟

山
水
松
石



江の明やちまらけ

るりみえりてさか

るをりてあはれ

理輝根 遠長

江の島

あな

岸の

り

海原

た

甚
松

浪蕪空江淨

てそよ木葉

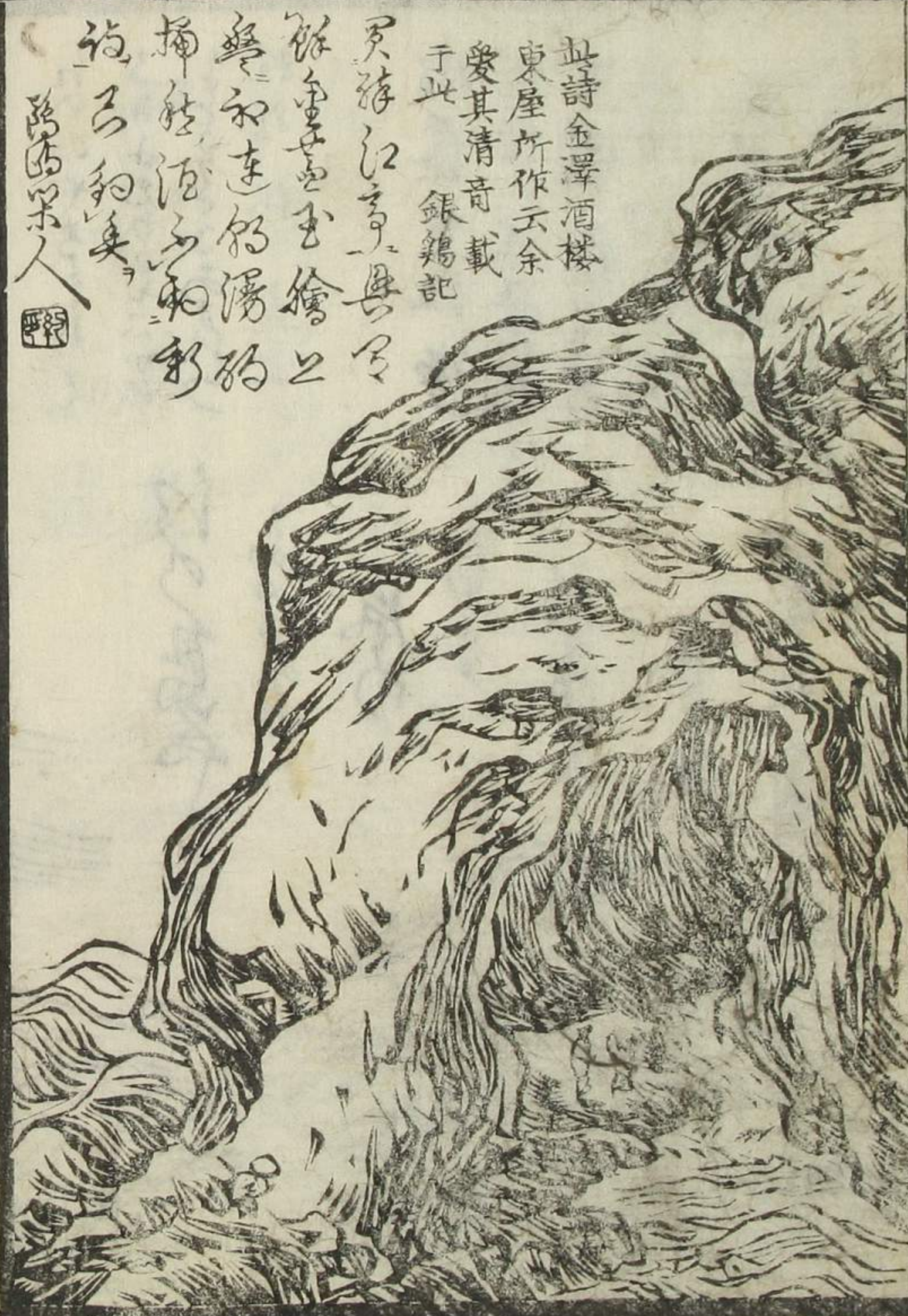
可憐 蕪草

石上釣糸

松高題



龍窟之圖



此詩金澤酒樓
東屋所作云余
愛其清奇載
于此 銀鷄記
買存江亭
蘇東坡詩云
龍窟在江亭
插龍酒亭初
始乃約矣

臨海山人

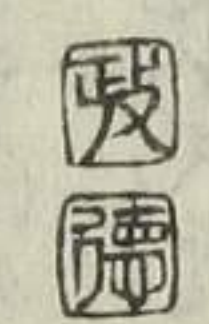
森々孤島峙蔚中
夕去時沙路通
聞說海神窟洞現
淵源恰是列龍宮

叡西韓和貞



靈洞望真思
寂然吟節一日此
周旋騷人誤
認遊觀地正是長
房壺裡天

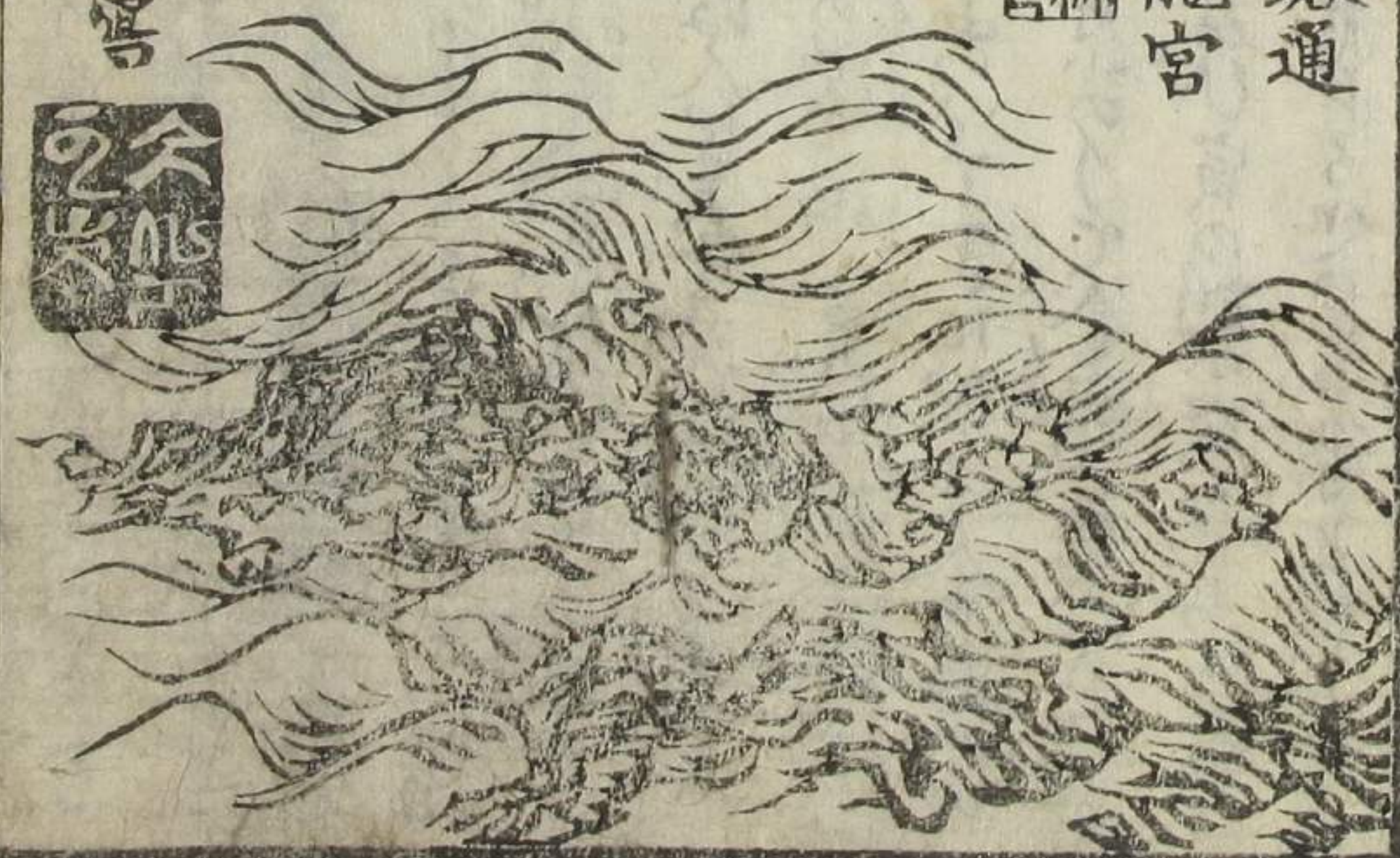
葛菴政德



孤島巖然積水連
恣濤奔浪勢凌天
遺靈千歲巖洞裏
賽祀亦存金女仙

鐵雞習題

雲峰寫



より遠く北海と云れぬ案をたがひたりと云たよりて雲のさる處と
つぬまへ江のぬちを岩屋の上より移若くふおいて岩屋のうらたを
はらと七日不動明王の呪と云て身と形現しあひく世を
利益せしめると母液とぬきんぐいのやうく七日の夜に天女現
るゆふは討ち若神と云けと後復風系の利益と云説せり
こもて女頭現しあひの初めをほへる皇平二代後深天皇の所
に弘仁五年二月弘法大師相創津村の邊に泊りあひ遠に高海との
ぞと島の風景と云ふふ忽然雲のつとまにわたり金龜を内
小瀬下大師御供ありあひ漁人の舟のうて金龜の内ふり駛せ
して天女とせんとをぬが七日まひ宿の刻も岩屋のうらたを
て天女現しあひ大師のうらたをぬが七日まひ宿の刻も岩屋のうらたを

秘する所の形像と作り岩屋の月陣ま部の中なる小安室と云て
の秘する所なりこれより大師と云ふ所の中奥の山奥に秘する所
春深法師安然の岩屋小安室と云て長徳を信しと云
秘する所の形像と作り岩屋の月陣ま部の中なる小安室と云て
素月とも價十二文の岩屋のふかき岩あり圍子とも云夫婦
だんごとり人の奥板石岩屋のふかき岩あり圍子とも云夫婦
の岩屋の坂下のたのうらふ小安室の石壁と云ふ小安室のうらたを
風濤石岬圍鳴雷直撼樓臺万丈廻被髮釣蓋滄
海客三山到處蹴波開
そ何小遊江邊と云人碑あり文字分岐がらびの又芭蕉のまを碑
あり
うたがら小安室の毫も浦のまを
又深川五羽橋のまを青衣の碑あり地燈籠あり

又依殿波高のまきりて神あり

瓊沙一路截波通孤嶼峻嶒峙海中潮漫龍主宮

東月花香天女廟前風客樓斫繪絃々白神洞燒

燈種々紅幾入蓬萊譜秘蹟不須幽討借仙僮

佐國隆高と毛相坐の介しておきか父全勢云行るの友と澄る

小遊ふ日かきふかおのまふお少ありて世荒せり

本宮御旅所 此所西東の山嶺あり毎年四月初の巳日小

遊の年天と神興のせり別處社造村人列と平一青木そは

処直を接の行列あり又十月初亥の日小元の岩屋遷きか

る同。拜殿の額 此の事大御神は此 銀箱にのり備と按

小建治元年九月廿二日信守度院宸筆と傳らる聖旨退教所

よりけらるの歌あり建治元年より天保元年まで五百八十二年

求聞持堂本堂のわきま ○ 開山堂求聞持堂の東あり ○ 末社稻荷 天降宮

○ 木柱の鳥居上の家よりなま ○ 銅の鳥居井や天の歌とく ○ 石の鳥居

○ 石燈籠檜ののりあり ○ 石の鳥居岩屋下の坂の上あり天下太平宮

十六日小江のくぬはらぐらばまは法族の普徳宮中せは法堂の中

すもーんとつろろふれはまわらまといさるはと法族ともを

本堂とらふ○法族の末の末をふて古き歌かれりあひうね

して口へるは鎌倉時代ののらふ仙小併座のまてと碑あり又歌

事のわきふ形ま松様亭子孫とあると碑あり

ちよぶが 湖の花の孫う那

児ヶ淵 岩屋おきる岩の下

の岩あり海な板石ありあき

くところちいぶあちと名づるといむう建長と廣徳廣徳宮

おもひのうらみまをさぐら。園の衾をさるる如く。いさよ守の御命と
 おひののめと出せらるる。さるる。いさよ守の御命と
 をさけとらるる。いさよ守の御命と
 昔さよあつれとさるる。いさよ守の御命と
 山の風は衣刺の夢をさへ。七重の濱の波は業障の垢をさへ。
 あひいはるる。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と
 一。いさよ守の御命と

學
 鴨

とがげて死ねるるといひつてた。それをいしては愛とちが
 とらふ。一。いさよ守の御命と
 白菊と思ふの里の人をさるる。思ひ入はの情とさるる。
 うさよ守の御命と
 思ふ自体をさるる。思ひ入はの情とさるる。
 うさよ守の御命と
 思ふ自体をさるる。思ひ入はの情とさるる。
 うさよ守の御命と

懸崖峻處捨生涯十有餘霜在利那花實紅顏碎岩石
 娥眉翠黛接塵沙衣襟只濕千行淚扇子空留二首歌
 相對無言愁思切算鐘為孰促歸家
 白菊の花のまきけのふるさつ海よさるる。思ひ入はの情とさるる。

思ふとらるる。思ひ入はの情とさるる。

ふじゆめならひて
 佛の乃も 墨漆の
 園となり 白菊に
 おのすも 霧のみり
 数なる 如くいん

ちんちんちん
 五文字
 寸の上り

あかほのくさの
 かほくさのくさの
 あかほのくさの

乾民具 書



銀籙



應需 雪麻呂画

根鷲ニ白クのう滑ツ有ク信ノ文ノまらきとととあひ入レの一白
 び。ハする音ヲ身ハ浪ノ下ニ等トあり又ハ東海道ニ在ル園舎白
 菊ハ忍ぶの里の人とととありこれハ赤と白とあやまりる白菊
 といふをもたわかなまるべ

又ハ江ノ島ノ入口ニ西町といふ旅番屋十二軒あり右六軒左
 六軒あり右の裏と獵所町といふ三軒あり右の裏
 小六軒あり

- 西町驛舎右側之部
 - 龜屋三左衛門
 - 江戸屋忠五郎
 - 讚岐屋島左門
 - 桔梗屋十兵衛
- 同驛舎左側之部
 - 繪圖屋善兵衛
 - 惠比壽屋茂八
 - 北村屋忠左工門
 - 名主橋屋武兵衛

- 紀伊國屋半六
- 堺屋弥平太
- 北村屋五郎兵衛
- 惠比壽屋吉左門
- 西町右裏驛舎之部
 - 北村屋伊右工門
 - 中村屋勘右工門
 - 大軒○紀伊國屋作左門
 - 堺屋平十郎
 - 渡邊四郎兵衛
 - 扇屋佐左衛門

- 獵師町驛舎之部
 - 池田屋傳六
 - 福島屋左右衛門
 - 小松屋孫兵衛
- 旅舎熱トク二十二軒
- 名主堺屋彦兵衛

大百味料 七兩二分 上壹人前 二分
 三兩三分 〇二夜宿 下 同 壹分
 〇百味講 同中 同小 一兩二分

左百味海苔の太し備はひら〜〜〜
 二百尺の宿を^{かざ}持来し〜途中止むらひつづる例い〜
 あり。〇^あ教熱く〜百五十尺の宿を〜
 細と高^あ〜三平六尺。〇^あ文具が〜不足が〜
 麩^あ〜湯を三杯あり。〇^あ地が〜
 若^あ〜の^あ堅く禁制〜となふ〜
 急^あ〜の〜^あ料理も極^あ〜
 〇^あ海苔〜の〜^あ下の〜と三ヶ処〜

す下の〜より岩屋へ系傳〜との〜はならび〜人あ〜
 道者の〜あふ〜〜〜
 〇^あ社は〜あり三社〜天の〜
 〇^あの〜あり上の〜の山の〜あり本^あ〜の院〜
 〇^あ〜あり岩屋の〜天の〜これ〜又山の〜
 〇^あ〜あり天の〜び〜〜
 〇^あ〜あり。〇^あ参詣の〜上の〜を〜
 〇^あ〜あり。〇^あ参詣の〜上の〜を〜
 〇^あ〜あり。〇^あ参詣の〜上の〜を〜

獵師町 本丁ともいふ町丁の左の〜も獵師の家もあ〜
 よりゆき寄り込三丁連極もあり左の岩が〜左の海へ入は〜

おもひたのてふいとけとくきを後なりとふ箱の社あり所なり
中種の右ふ小岩屋の地蔵あり中ふ小橋あり春うづれぬは橋の
くもち春うづれぬの橋よりなるは社の後の山末松之本ありを
まゝと壽は社の風景種妙なりと書たりとくは箱の社あり
の新場山回系所ふゆりておの作らざるもかすれきとやては風のあ
はる形もありそそ水のあつくふ貝細工の屏風とくはとたりと
甘うは所よりて舞臺島にて朝細文細不利とくはとひとさるる
くはなり

江の島産

鮎の粘漬

ひたきの袋入

貝細工の屏風

江の信貝

幅海苔

箱入の貝

貝細工の屏風

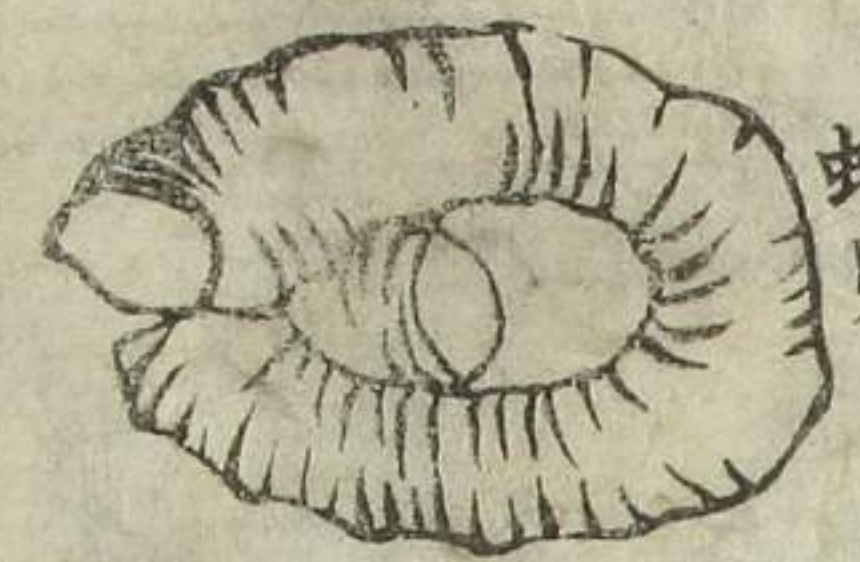
ぬきま江のぬりやむらとるのよる山嶽多

釋亮恵

くらやばし貝を箱の板さる
又ぬくのころやたりとふさるる貝

左簾
瓜頂





蛇貝



貝子せき



八奇貝



日貝



木貝

紫貝



鐘馗貝



石貝



土貝



橋貝

ワラサキ



よあけ貝



橋貝



おとこ貝



青貝



かた貝



小貝



鯛



おとこ貝



かた貝

あひな



甲冑もあつて儼と立ちまはるるにさしあはるるに
 トのくあひつゝまをさすも歩勢なきはゆきつゝ
 とせしきとくふれをゆはるる小過るれひきり
 一 乃中持の懐中の袋よりそそぎにゆつゝ昔人のあきつり
 と鬼角つゝえだうまのひたのちの懐へ入るる
 まありな中へ立ちあがりて
 驚き立ちあがりて
 こころをさす

一 合子よりさするる綱をくみて持て懐中の
 秘のしそお大切の心き相又の忍ぶるの
 道中へ引之てぬがひぬとあつゝの心を
 へ

一 道中獨つゝの行交僕とられつゝその
 へ

くすくすたるる二三百の猿もも両具へ用さす
 途巾つゝ織小雨す巾あるる小
 獨旅の包のうちに懐紙と一枚をかくて
 布をさす

一 乃中用をさするる乃牙二尖三帳面扇子
 はさみ綿糸本綿糸あるるの綿巾
 手ぬぐひあつてその風流ある何れも
 つとけあつてのなかぬ様へ雨ふれ
 のるれが書おきりてのまゝとて
 通下らるる金傷は痛あつての
 あつてのるれをさすつゝ山樹 胡樹
 明禁と懐中すつゝ道中用をさするる
 付

舞方どのらびち申して素人にも調合のせきさるやうふけあす
かきせわあまの繁く試してその糸方の奇なるを知らるる
一 ときよびはもを縫ゆくも量鞋のさしひの人々の如く半抜
善履よく縫ゆするものへ向われはばいふるうて出は素
足まなうてあらくいささくあらえあそも山坂又ハ赤むの物
あまいうてやもすれはあろがとありそ付足のやまやうて
すくらぬ法ありそ法といふ足とくらうて一足とびふ靴をい
いふも細くあらくべく変へてするすなりたの如くおやま
小あらくぬいぬあーかのく方のらうておみ物半足ふちの
あけぬは必ずする一足あるさふふぬぬときハ左足の足は
の力入るかあすだうて行へ是浪勢年未接ゆして付る処の
経路の良法也

一 及して馬籠着をすむると歌坊の入口にはい必あるといふ

不利さればそむらふゆりすへ兼心もあるさふはがゆす
ことなご変へてすづくづくばこも喧流の元とせうとていひま
一 一とくくつていひむくもいふ
一 様着をる苗女いぞいひたることまへり定宿あり一
てもさうわれずほく四男人のいぞむむていひよふとてう紳を
ひきあふのうもく引とるとありしやなあるとわれはとて女
いもとうちたさきおぢがなびらうてあまうくとお通の
りんちのあまうとさくはとひてまごらふするといひまをま
小そまのいひき定宿ありばそををちてせ又沈ふとてい
たら先の前とす統と言はれはあるとさハ必用にするめい
一 様着をるつきて湯小入るとさつさう又供とていあれは
どうあれ紙入綱を紋布を糸小包のさおの湯場と持来し
風呂敷へつとみと上へ着りのとせせおのれがええるま

湯のふくは是を日くの後着をうつさすのちぬくと舞
舞の着て湯ふ入り食事をとまひ理育のあつくと御
種々のみて手場と有りあり燗燗と二枚りあり
ふちび使五のの使と手様着るよりて
とありされ昼のちふつさして
小使の着隠とよよりて見せおく
樹金の女子の女房とよびてな
とすらすりればを小息りあるとき
る殊よあ羽の及中
ふちのむくまじも
及すのう不忠生とすらすりては
獨様ととうく箇ちとやめ

一 湯のふくは是を日くの後着をうつさすのちぬくと舞
舞の着て湯ふ入り食事をとまひ理育のあつくと御
種々のみて手場と有りあり燗燗と二枚りあり
ふちび使五のの使と手様着るよりて
とありされ昼のちふつさして
小使の着隠とよよりて見せおく
樹金の女子の女房とよびてな
とすらすりればを小息りあるとき
る殊よあ羽の及中
ふちのむくまじも
及すのう不忠生とすらすりては
獨様ととうく箇ちとやめ

一 御下り改りて容易とあらす武家かなやうの
共同をと頼まてはとる指号とて貫一
よりて英張とともとつりたあ
一 歌とねらると高へかづく
とけり聊志展と増
ひちりする夏がと寄合ひ
くらちるもの

一 道中も食事をとすふ平日のなめを食し
食をてしちとさふ沢山
とんるにいくもか多く一膳
平日の三ツツと飲起し殊
芋の歌あしと飽食す

在りあり 乃中くつびれなきとき足とあるひらするまじき
 たり 況んともどもなわりの夏の旅はどくを定めてのき
 ちたるやまといふのやま中流せ川のまゝにありまゝの
 場と志をくく足をとひておくとさへくつびれ速くぬく
 のの薬を体してたゞひへは山お水をくらみおきそ中足
 とひておきくらしとわけなきら食言なきくそのふへい
 食言すらくちふくつびせぬけ定めておつがるまゝに
 せいせいで

銀鷲を若くは況小船よあひする時おとのあは死せる乃
 況といふ事は備わられまゝとつるそやまゝに又若くは運
 まりてええなるのたきもたらぬえぐくまると舟子あひた
 も湯争いあがりたるも是皆熱とあらうて逆とするれば
 必すのみく即死といふの備不致なり今湯争いおくれ
 へ爰小略す

此のちあともさくけ又若小の布せつるまゝに人の髪とさきて
 ちと持てくさうと色は速くおの布せぶるものなほあひた
 はちちさく冷らるとのやせ同じく切ちあきかるといふそ
 けいそ極まるといふべられと紙紙のつくす妙あつたれ
 へ爰小略す

○方中よりえふはとる薬方二十方といふ心ある人の製
 方一々用之—是皆年来経験の良方なり

良方煎

方家

此のまうの風はくひの妙方なり

紫蘂

葛根

麻黄

大各

香附子

陳皮

芍薬

肉桂

中各

甘艸

右味目方

二枚

をい

合せ

やう

けし

用之

消暑散

同

此のまうの暑氣

をあや

ねつは

よく

除痛

する

と

候す

厚朴

五枚

白朮

茯苓

陳皮

谷三枚

乾姜

白藜豆

谷二枚

桑葉

草豆冠 甘草各一 右九味細末くて一度ふ一たづまぬて用ふべし

萬金一方同 あり傷まけくつたひして用ひて百発百中治せずしらず

唐蒼朮大 陳皮 半夏 薩摩厚朴 青葉藿香

山査子 葶藶中 麥芽中 唐木香 甘草 大棗各小

右十二味一服と目方二匁ふと合せ水合一合茶下用ふべしせくもういひ

づれの食傷ま用ひても速ふ治すると奇中の奇心

錦玉散同 水つりと治する妙方と云ふ懐中ふたけへし

唐蒼朮大 陳皮 茯苓 薩摩厚朴各三 大棗 甘草各一

右六味細末くて一度ふと合せ水合一合茶下用ふべし

批杷葉湯同 此くすりの世もありつたるたらしのちあんにあるはのり

批杷葉湯同 此くすりの世もありつたるたらしのちあんにあるはのり

にありてはまのりる志のりるんの色の病も吐のこもさるり

用ひてそ効奇とりへべし 批杷葉大 肉桂 白朮 干姜

義木 青葉藿香 木香 吳茱萸 甘草小

右九味二匁ふと合せ水合二合一合茶下用ふ

如神散同 生冷菓瓜あり腹さづけ後痛をく又ハ松葉のひち用ひ

て速ふ治するを効神のり 黄栢生 黄栢生 黄栢香 黄栢香

葛粉二匁 胡椒八分 燒塩二分 右六味細末くて一度ふと合せ水合一合茶下用ふ

その用ひべし

鶏鳴散同 身と治する奇方と云ふ筆紙つくり用ひして

功を考へし 黄栢 山柘子各小 右三味と打撲の力を

よまるびひよさらむどのへといふ葉の目と二匁と合せ水合一合茶下用ふ

一合とせてつち糲とすくそのと混じ粉とつれて泥の如く用ひし

づくちやくちあり身のばよぬべし痛がなく治すべし

孔明散同 血苗の妙方と一夜のちあり肉とする子お傳の葉と

香附子四 当飯 熟地黄 白芍藥各五 白犀角三分

右五味極細末く 煎只 分め くる

金王散同 昨ま 逆さか といと あり妙方なり

大豆各 蒼朮各 粉五分 右二味細末く へと 煎く 五分を 角へ

榆栢膏同 湯火 傷と 治す 妙方なり

石羔 黃栢 黃丹 榆白皮 桐木各 皮各 右五味細末と

胡麻の油と 煎く 此果 細末く へと 煎く 懐中 不な く

順腸丸同 脹張 大便通 妙なり 大黃五 黃苓

黃連 麻仁各 硝石各 右五味細末く のり へと 煎く 上に

十五を 煎く 用ふ へと 煎く 大き 煎く 妙なり

萬治膏同 此の 妙なり 煎く 妙なり 煎く 妙なり

いみを 煎く 妙なり 煎く 妙なり

当飯 地黄各 右二味と胡麻の油二 合の中 入て 煎く 妙なり

とこ 煎く 妙なり 煎く 妙なり

やくと 煎く 妙なり

河豚 いみ 煎く 妙なり

蟹 いみ 煎く 妙なり

鯨 いみ 煎く 妙なり

蕎麥 いみ 煎く 妙なり

酒 いみ 煎く 妙なり

餅 いみ 煎く 妙なり

茸 いみ 煎く 妙なり

魚鳥 いみ 煎く 妙なり

大
高
山



燕石樓著述藏板目錄

書畫蒼粹初編三卷

刻成既不出

同二編三卷

在刻

江戸の濱の波一卷

刻成既不出

徳島七里の濱二卷

近刻

増補聞雲愚抄二卷

全

道志成田はく二卷

在刻

江戸神佛縁日記初編卷

全

